

県営畠地帯総合土地改良事業曾於東部二期地区(家野工区)に伴う
埋 蔵 文 化 財 発 掘 調 査 報 告 書

家 野 遺 跡

1994年3月

鹿児島県曾於郡志布志町教育委員会

序 文

本町は埋蔵文化財包蔵地が多く、「縄文銀座」と称されるとおり、縄文時代の遺跡を中心に前川、安楽川沿いに200か所以上の「周知の遺跡」があります。

これらの遺跡は、農業基盤整備事業或いは宅地開発等の開発行為により、発掘調査等が実施され、貴重な資料を提供するとともに、遺跡の性格等が解明されつつあります。

本書は、平成4・5年度に実施しました、県営畠地帯総合土地改良事業曾於東部二期地区（家野工区）における、家野遺跡の発掘調査報告書であります。

家野遺跡からは、縄文時代早期から晩期にかけての遺物が出土しており、特に縄文時代後期の資料が充実しています。

ここに、その調査結果を報告書として刊行いたしますが、この報告書が広く文化財保護並びに学術研究の一助となれば幸いです。

発刊にあたり、指導者や作業協力者の皆様、また、調査に御協力いただいた作業員の皆様、並びに関係各位に対し、厚く御礼申し上げます。

平成6年3月

志布志町教育委員会

例　　言

1. この報告書は、平成4・5年度に実施した、県営畠地帯総合土地改良事業曾於東部二期地区（家野工区）に伴う、家野遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
 2. 緊急全面発掘調査は、志布志町教育委員会が調査主体となり実施した。
 3. 調査における測量・写真撮影は、主に米元・小村が行い、調査の実施にあたっては、県教育庁文化課及び県立埋蔵文化財センターの指導・協力を得て実施した。
 4. 本書に用いたレベル数値は、すべて海拔高である。
 5. 遺物番号については、通し番号とし、挿図・図版とも一致している。
 6. 出土遺物は、志布志町教育委員会で一括保管し、公開展示する予定である。
 7. 本書の執筆および編集は主に小村が行った。
 8. 遺跡の調査、遺物の整理にあたり、次の方々に御教示、御協力賜った。
- 坂元裕樹、杉尾木の実、生重美恵子

報告書抄録

ふりがな	いえのいせき				
書　名	家野　遺跡				
副　書　名	県営畠地帯総合土地改良事業曾於東部二期地区(家野工区)に伴う発掘調査報告書				
卷　次					
シリーズ名	志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書				
シリーズ番号	第24集				
編　著　者　名	小村美義・米元史郎				
編　集　機　関	志布志町教育委員会				
所　在　地	〒899-71　鹿児島県曾於郡志布志町志布志2542番地 0994-72-1111				
発行年月日	1994年3月31日				
ふりがな 所　取　遺　跡	ふりがな 所　在　地	市町村コード－遺跡番号 北緯°'\"　東経°'\"	調査期間	調査面積	調査原因
いえのいせき 家野遺跡	かごしま 鹿児島県 そお 曾於郡 しぶし 志布志町 ひの 帖字家野	68-45 131° 08' 59" 31° 30' 19"	平成4年 5月20日～ 9月11日	約1050m ²	農業関連整備に伴う緊急全面発掘調査
所　取　遺　跡　名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特　記　事　項
家野遺跡	散布地	縄文時代早期 前期 中期 後期 晩期	集石遺構8基	前平式、押型文土器、阿高式系土器、指宿式、市来式、丸尾式、磨消縄文土器、中岳式、黒川式	

本文目次

序文
例言
報告書抄録
目次

第Ⅰ章 発掘調査の経過

第1節 調査に至るまでの経過	1
第2節 調査の組織	1
第3節 調査の経過	2

第Ⅱ章 発掘調査の概要

第1節 基本土層	5
第2節 遺構	5
第3節 出土土器	10
第Ⅲ章 まとめにかえて	42
図版	49

挿図目次

第1図 遺跡位置図	3	第14図 15類土器（4）	17
第2図 調査区域及びトレンチ配置図	4	第15図 15類土器（5）	18
第3図 土層柱状図	5	第16図 16類土器（1）	19
第4図 南北トレンチ土層断面図	6	第17図 16類土器（2）	20
第5図 東西トレンチ及びC地点土層断面図	7	第18図 16・17類土器	21
第6図 集石遺構実測図（1）	8	第19図 17類土器	22
第7図 集石遺構実測図（2）	9	第20図 18類土器（1）	23
第8図 1類土器	11	第21図 18類土器（2）	24
第9図 2～9類土器	12	第22図 18類土器（3）	25
第10図 10～14類土器	13	第23図 19類土器（1）	26
第11図 15類土器（1）	14	第24図 19類土器（2）	27
第12図 15類土器（2）	15	第25図 19～22類土器	28
第13図 15類土器（3）	16	第26図 22・23類土器	29

第27図 24類土器 (1)	30	圖 版 目 次
第28図 24類土器 (2)	31	図版1 ①遺跡遠景 (北より)
第29図 25類土器 (1)	33	②遺跡遠景 (北より)
第30図 25類土器 (2)	34	③土層断面図 (12トレンチ北壁)
第31図 25類土器 (3)	35	④土層断面図 (16トレンチ西壁)
第32図 25・26類土器	36	⑤A地区調査風景 (北東より)
第33図 27類土器 (1)	37	⑥A地区遺物出土状況 (南西より)
第34図 27類土器 (2)	38	⑦B地区遺物出土状況 (北より)
第35図 27類土器 (3)	39	図版2 ①C地区調査風景 (東より)
第36図 28・29類土器	40	②C地区Ⅲ層遺物出土状況 (西より)
第37図 29・30類土器・円盤状土製品	41	③前平式土器出土状況
		④阿高式系土器出土状況
		⑤1号集石遺構検出状況
		⑥6～8号集石遺構検出状況
		⑦4号集石遺構検出状況
表 目 次		
第1表 円盤状土製品観察表	39	
第2表 土器観察表 (1)	41	
第3表 土器観察表 (2)	43	
第4表 土器観察表 (3)	44	
第5表 土器観察表 (4)	45	
第6表 土器観察表 (5)	46	
第7表 土器観察表 (6)	47	
第8表 土器観察表 (7)	48	

第Ⅰ章 発掘調査の経過

第1節 調査に至るまでの経過

鹿児島県教育委員会（県文化課）では、県下の市町村教育委員会と連携し、文化財の保存・活用を図るために、各関係機関との間で、事業地区内における文化財の有無及びその取り扱いについて事前に協議し、諸開発との調整を図っている。

この事前協議制に基づき、大隅耕地事務所（以下、耕地事務所）は志布志町祐宇字田床地内における、県営畑地帯総合土地改良事業曾於東部二期地区（家野工区）計画策定にあたり、実施計画区域内の埋蔵文化財の有無について、志布志町教育委員会（以下、教育委員会）に照会した。

これを受けて教育委員会は、当該事業地区的分布調査を実施した。その結果、当該事業区域内に「家野遺跡」が存在していることが判明した。

このため教育委員会は事業実施前に、遺跡の範囲・性格等の把握を目的とした確認調査（平成4年5月20日から6月20日）を実施した。その結果、縄文時代の遺物等が出土した。

このことを受けた耕地事務所は、設計変更が不可能なことを報告した上で、記録保存を目的とした緊急全面発掘調査を要望した。

これを受けて教育委員会は、平成4年6月22日から9月11日まで緊急全面発掘調査を実施した。緊急全面発掘調査は志布志町教育委員会が主体となり、県教育庁文化課及び県立埋蔵文化財センターの指導・協力を得て実施した。

第2節 調査の組織

1 確認調査・緊急全面発掘調査（平成4年度）

調査主体	志布志町教育委員会	教 育 長	徳 重 俊 二
調査責任者	〃	社会 教育 課長	慶 田 泰 輔
調査調整	〃	社会教育課長補佐	井 手 富 男
調査事務	〃	兼社会教育係長	
	〃	主 査	米 元 史 郎
調査事務	〃	主 事 补	小 村 美 義
調査担当者	〃	主 査	米 元 史 郎
	〃	主 事 补	小 村 美 義

2 整理作業・報告書作成（平成5年度）

調査主体	志布志町教育委員会	教 育 長	徳 重 俊 二
調査責任者	〃	社会 教育 課長	慶 田 泰 輔
調査調整	〃	社会教育課長補佐	井 手 富 男
調査事務	〃	兼社会教育係長	
	〃	主 査	米 元 史 郎
〃	〃	主 事 补	小 村 美 義
担当者	〃	主 事 补	小 村 美 義

第3節 調査の経過

1 確認調査（平成4年度）

事業計画区域内の地形等を考慮しながら、合計24か所（一部、拡張トレーニングを含む。）のトレーニング（以下、「T」）を設定し、確認調査を実施した。

その結果、1・7・13・14・20T以外のトレーニングから、縄文時代後・晩期を主体とする遺物・遺構を検出した。確認調査は、平成4年5月20日から同年6月20日まで実施した。

2 緊急全面発掘調査（同年度）

緊急全面発掘調査は、平成4年6月22日から同年9月11日まで行い、事業計画区域内で圃場整備工事により、遺跡の現地保存が不可能な部分について、記録保存を主目的として実施した。

遺跡のはば中央の南側にA地点、A地点の北東側にB地点、さらにB地点の東側にC地点を設定し、実施した。

3 A地点の調査

A地点は、確認調査の16T付近の標高86.7mを測る場所で、現況は緩やかな微高地であった。

緊急の全面発掘調査は、まず調査面積・期間の縮小・短縮を主目的とする、8ヶ所の「L」字型の試験Tの調査から開始した。この試験Tの調査結果を考慮した上で、工事により削平を免れないと思慮される、最低限度の面積について調査を実施した。

全面発掘調査は、北側から南側へ、1・2…、東側から西側へ、A・B…とし、1-A区、1-B区、2-A区、2-B区…と呼称する、10mのグリッドを設定し実施した。

調査の結果、縄文晩期の集石4基、縄文早期の集石3基の遺構とともに、多量の土器等が出土するに至った。

縄文晩期の遺物等は調査区の西側では、遺物包含層が人為的な削平を受けていたことから、東側に集中する傾向がみられた。また、縄文早期の遺物包含層は良好な状態で残存していたが、住居跡等は検出できなかった。

4 B地点の調査

B地点は、A地点より標高が低く83.6mを測る場所で、現況は北側から南側への緩傾斜が認められた。縄文後・晩期の遺物包含層が厚く堆積していたことから、A地点の東側から若干の遺物の流れ込みを考慮する必要がある。

先述のとおり、現況は北側から南側への緩傾斜は認められたが、南側にいくほど遺物出土が希薄となっていた。調査の結果、遺構は検出できなかったが、多量の縄文後期の土器等が出土した。

5 C地点の調査

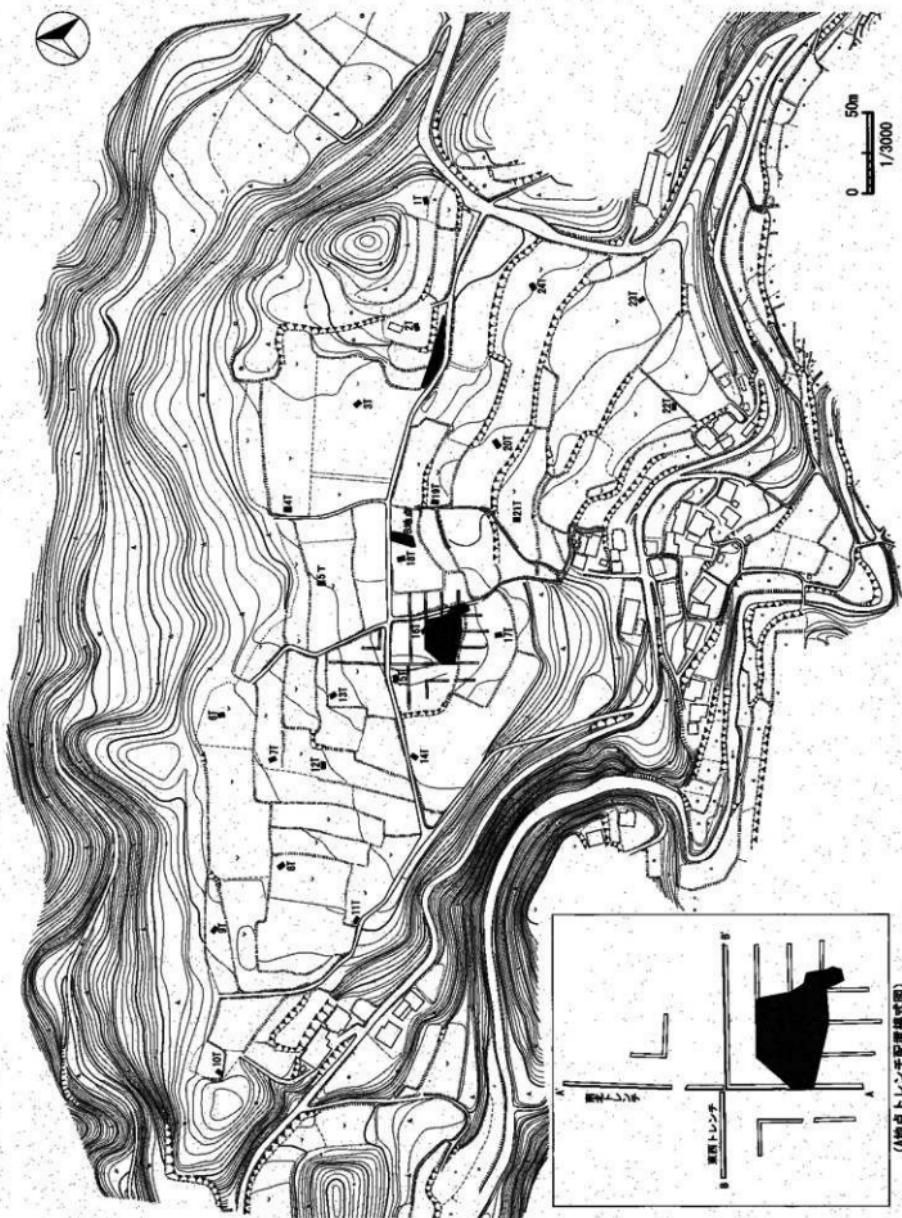
C地点の標高は87.1mを測り、A地点とほぼ同様の高さである。C地点においてもB地点と同様に、縄文後期の遺物包含層がかなり厚く堆積していたため、北側の微高地からの遺物の流れ込みの可能性を考慮する必要がある。調査の結果、遺構は検出できなかったが、多量の縄文後期の土器等が出土し、ほぼ完形に復元できる土器も検出した。



第1図 遺跡位置図

第2図 調査区域及びトレンチ配置図

(A地点トレンチ配置図)



第II章 発掘調査の概要

第1節 基本土層

家野遺跡は、笠原山塊から西に向って突出する舌状台地である、天堤集落の背後にある家野原台地上に位置する。

I層：旧耕作土で、比較的軟質である。色調・硬さ等により、数層に細分される。

II層：暗茶褐色土。弥生時代以降の遺物を包含する層である。C地点を主体として、極少量の遺物が出土している。

III層：黄褐色土。縄文時代前～晚期の遺物包含層である。B・C地点では非常に厚く堆積しており、流れ込みの可能性も否定できない。

IV層：暗茶褐色土。ゴマシオ状の火山灰を包含する硬質土層である。霧島起源の「御池」に比定される。

V層：茶褐色土。下部に池田起源の黄白色軽石を包含する。場所によっては、硬質となっている所もある。

VI層：橙色火山灰土。いわゆる「アカホヤ」と呼ばれる層である。下部に砂粒状のバミスが認められる。

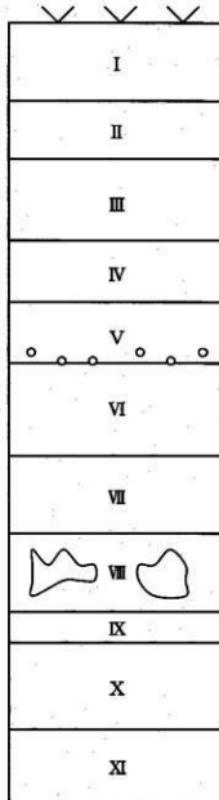
VII層：暗茶褐色土。縄文時代早期の遺物包含層である。場所によっては色調・硬さ等により数層に細分できる。A地点では多量の遺物が出土している。

VIII層：乳白色硬質土。「薩摩」と呼ばれる層である。場所によっては、色調・硬さ等によりa・b（ブロック）層に細分できる。

IX層：暗茶黒褐色土。縄文時代草創期相当層である。場所によつては認められない。

X層：茶褐色粘質土。粘質が強い層で、いわゆる「チヨコ」と呼ばれている。色調・硬さ等により、数層に細分できる。

XI層：黄灰色火山灰土。「ヌレシラス」と呼ばれる層で、多量の黄白色軽石を包含する場所も認められた。

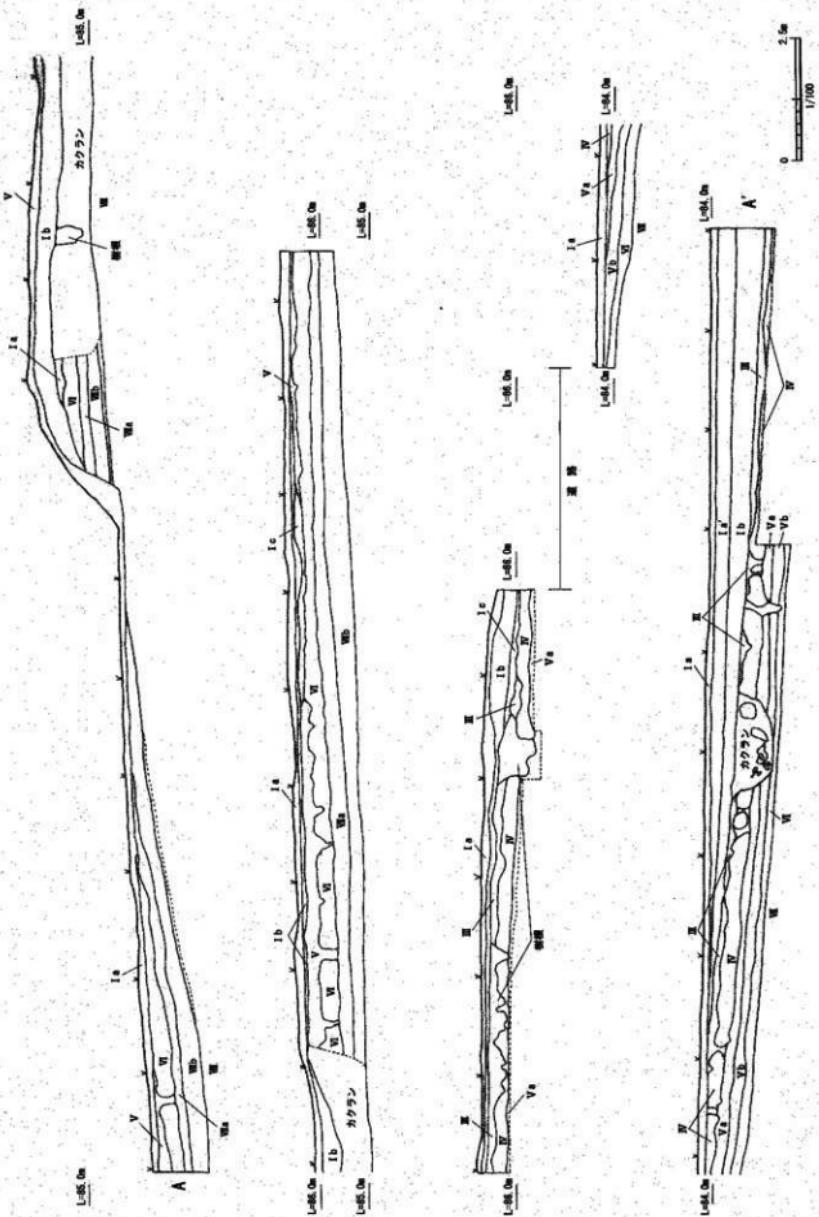


第3図 土層柱状図

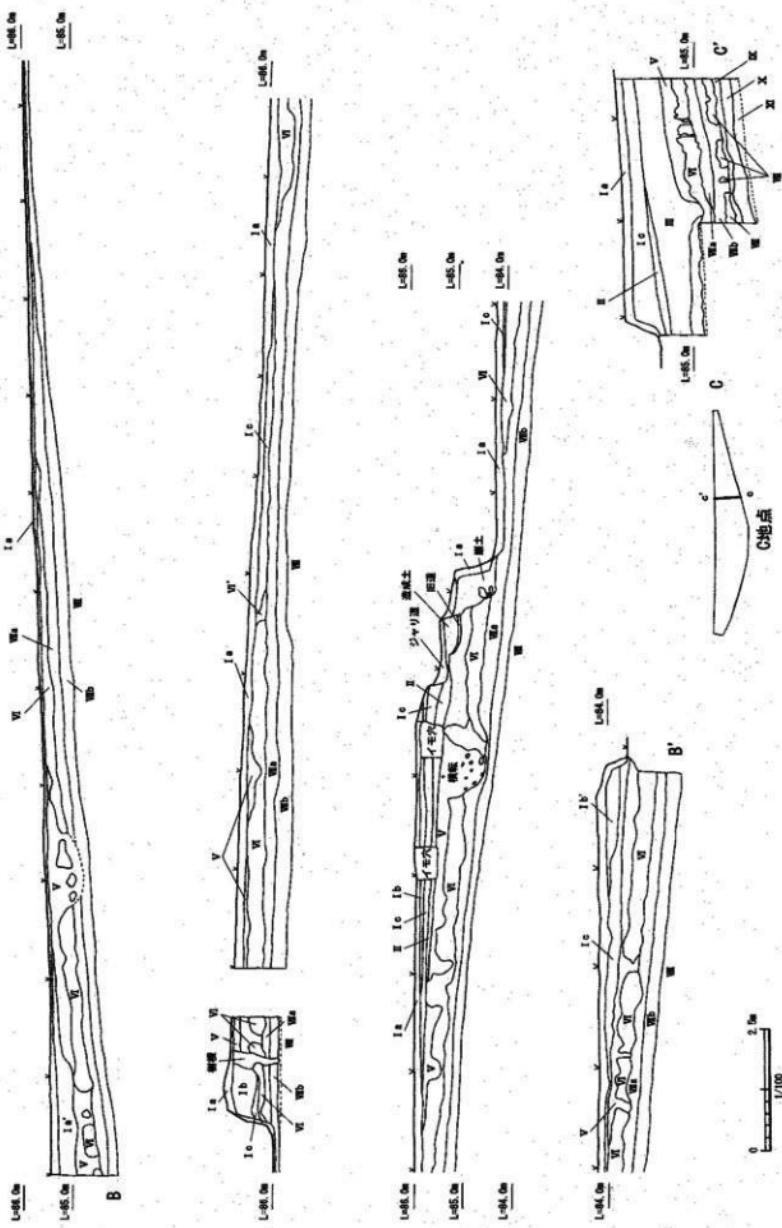
第2節 遺構（第6・7図）

家野遺跡からは集石遺構が8基検出された。その検出面から、縄文早期（1～3号）と縄文後～晚期（4～8号）に区分される。そのうち、6～8号は近接した状態で検出された。また、全ての集石遺構で掘り込みは確認できなかった。なお、幾つかの集石遺構については、位置とレベルの記録を怠ったものもあり、反省する次第である。

第4図 南北トレーンチ土層断面図



第5図 東西トレンチ及びC地点土層断面図



1号集石

A地区7-D区のVII層から、56点程の礫が $150\times110\text{cm}$ の範囲で検出された。 $90\times70\text{cm}$ の範囲でまとまっている箇所とその周囲の散在した礫で構成される。5~15cm程度の大きさの礫が多い。集石の近くからは土器片（1類土器口縁部）が1点出土している。

2号集石

A地区のVII層から、44点程の礫が $65\times50\text{cm}$ の範囲にまとまって検出された。5~10cm程度の大きさの礫が多い。

3号集石

A地区のVII層から、60点程の礫が $85\times80\text{cm}$ の範囲で検出された。中央部がやや散在している。5~10cm程度の礫が多い。集石内からは土器底部片が1点認められた。

4号集石

A地区7-B区のIII層から、123点程の礫が $130\times70\text{cm}$ の範囲で検出された。 $80\times80\text{cm}$ の範囲でまとまっている箇所とその南側に $50\times40\text{cm}$ の範囲でやや広がった状態の箇所で構成される。10cm程度の大きさの礫が多いが、30cmを超える礫もみられる。集石内では打製石斧・磨製石斧・敲石・石皿など複数の石器が認められた。

5号集石

10トレンチのIII層で、140点程の礫が $180\times170\text{cm}$ の広い範囲に散在した状態で検出された。10cm程度の大きさの礫が多い。

6号集石

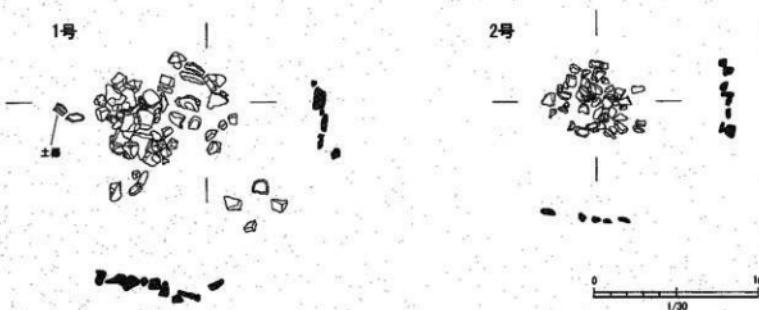
A地区8-B区のIII層から、98点程の礫が $150\times90\text{cm}$ の範囲にまとまって検出された。10~15cm程度の大きさの礫が多い。集石の近くからは打製石斧の完成品が出土している。

7号集石

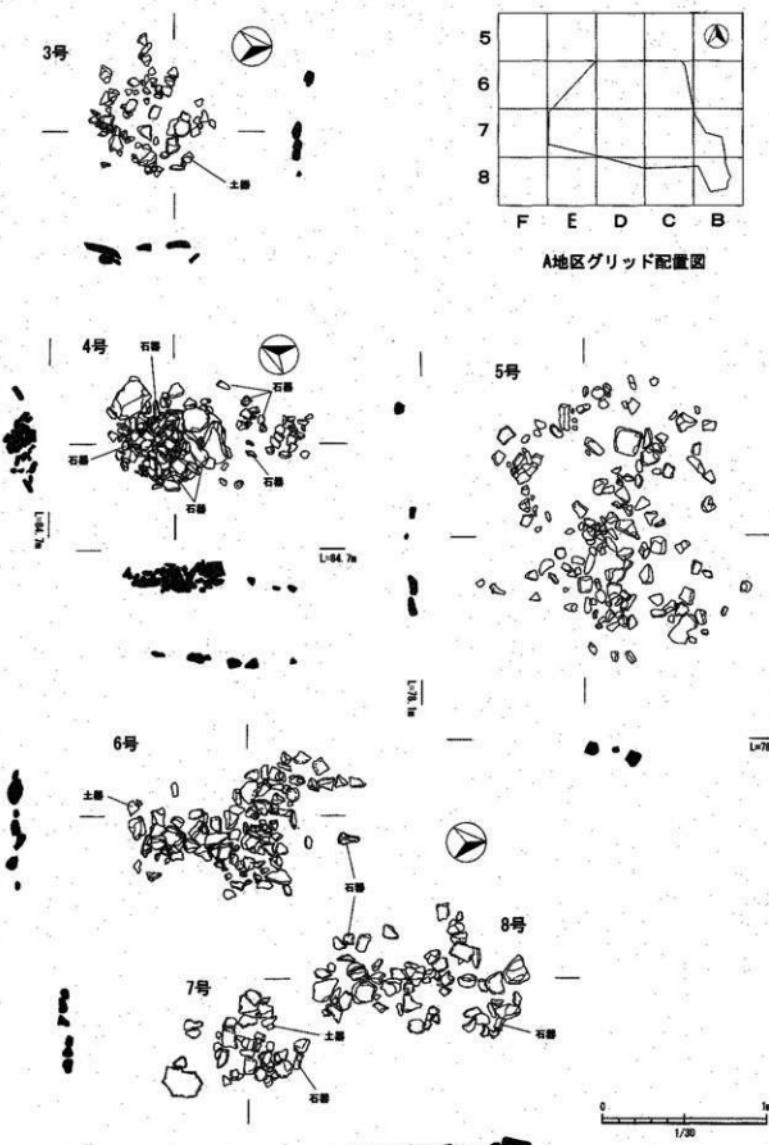
A地区8-B区のIII層から、38点程の礫が $90\times70\text{cm}$ の範囲にまとまって検出された。10cm程度の大きさの礫が多い。集石内からは打製石斧1点と土器片1点が認められた。

8号集石

A地区8-B区のIII層から、62点程の礫が $140\times80\text{cm}$ の範囲にやや広がった状態で検出された。15cm程度の大きさの礫が多い。集石内からは打製石斧が2点認められた。



第6図 集石遺構実測図（1）



第7図 集石造構実測図（2）

第3節 出土土器

家野遺跡出土の繩文土器は、形態及び文様により1～30類に分類できた。このうち、1～9類土器は早期に、10～13類土器は前～中期後葉に、14～27類土器は中期末～後期に、28・29類土器は晩期にそれぞれ位置づけられる。なお、型式不明の土器を30類土器とした。これら以外に、円盤状土製品が認められる。

出土状況について、早期土器はⅦ層から出土し、主にA地点で認められる。前～中期後葉の土器は出土量が少なく、際立った傾向は認められない。出土量が最も多い中期末～後期の土器は、B・C地点のⅢ層から出土している。晩期土器はⅢ層から出土し、主にA地点で認められる。

各類土器の特徴は以下のとおりである。

1類土器（第8図 1～2）

口縁部に連続する刺突を施し、直行する口縁部の上端に縦位・斜位の貝殻刺突文を施すものである。胴部に目の細かい貝殻条痕を施す。

2類土器（第8図 3～18）

直行する口縁部の上端に刺突文を、胴部に斜位の粗い貝殻条痕をそれぞれ施すものである。口縁部の刺突文には貝殻腹縫によるもの、ヘラ状工具によるもの、幅広のものが認められ、1段だけでなく、2段に施すものもある。円筒形と角筒形がある。

3類土器（第9図 19）

斜位の貝殻条痕の上に貝殻刺突文を加えるものである。口縁部には横位の貝殻刺突文を、胴部には縦位・斜位の貝殻刺突文を施す。

4類土器（第9図 20～23）

口縁部に縦位の貝殻刺突文を施し、胴部に貝殻押引文を施すものである。

5類土器（第9図 24）

3類または4類の底部と考えられるものである。底端部に縦位の短沈線文を巡らせる。

6類土器（第9図 25）

外面に横位の貝殻刺突文を施すものである。

7類土器（第9図 26～28）

外面に短沈線文を羽状に施すものである。口縁部がやや内溝する。内外面ともに丁寧なナデ調整を行う。胎土に金雲母を含むものと石英・長石類を多く含むものの2種類が認められる。

8類土器（第9図 29～34）

回転原体による施文を行うもので、格円文や山型文、条線文、連点状のもの、撚糸文、撚文などがみられる。口縁部内面にも施文される。

9類土器（第9図 35）

網目撚糸文を施すものである。

10類土器（第10図 36）

沈線文を幾何学的に施すものである。

11類土器（第10図 37・38）

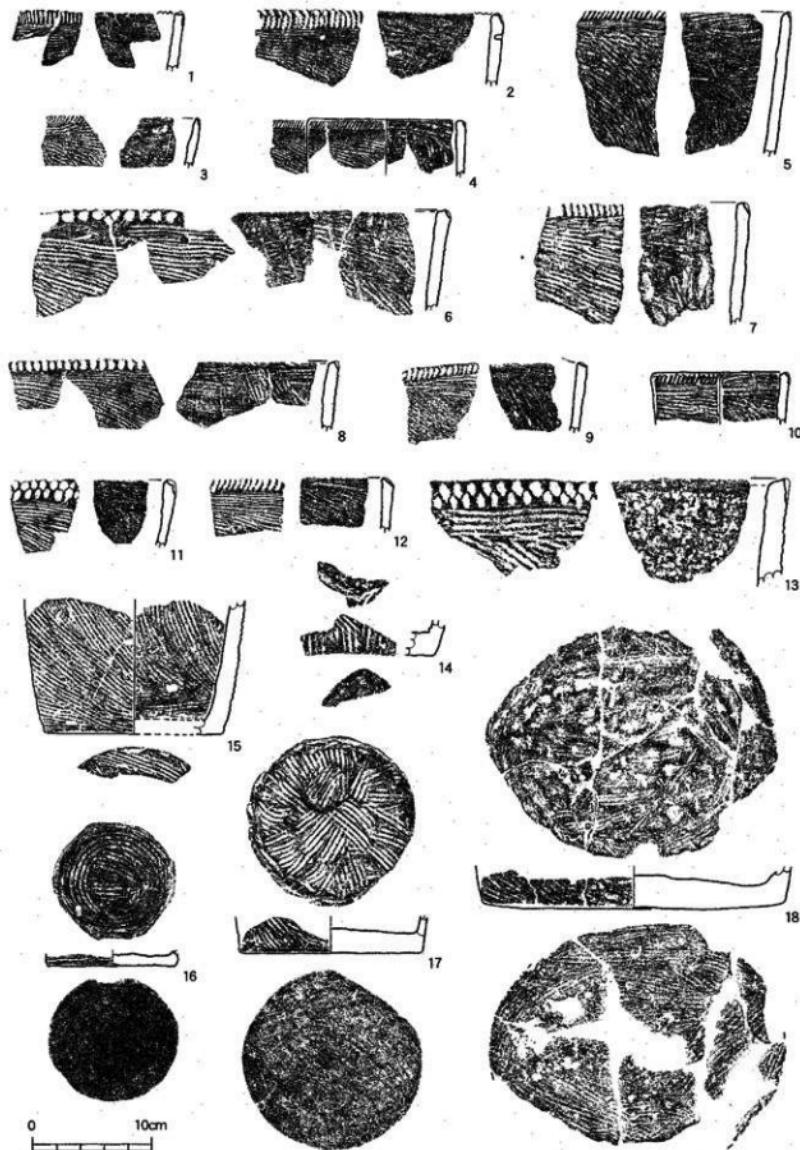
貝殻連点文や突帯文、貝殻刺突文を幾何学的に施すものである。口縁部内面にも施文される。

12類土器（第10図 39）

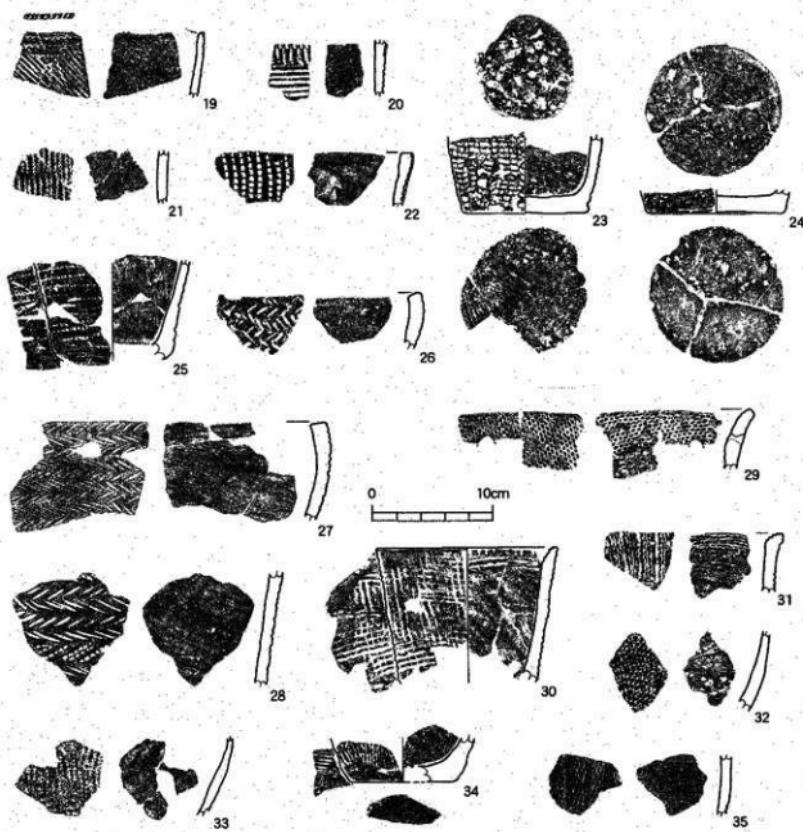
キャリバー形の口縁を呈するものである。口縁部に波状の沈線文を施す。

13類土器（第10図 40・41）

突帯を曲線状に施し、その突帯上に貝殻刺突文を施すものである。胎土に金雲母を含む。



第8図 1類土器



第9図 2～9類土器

14 類土器 (第10図 42)

側部に筋削文を施すもので、鉢形を呈すると思われる。胎土に滑石を含む。

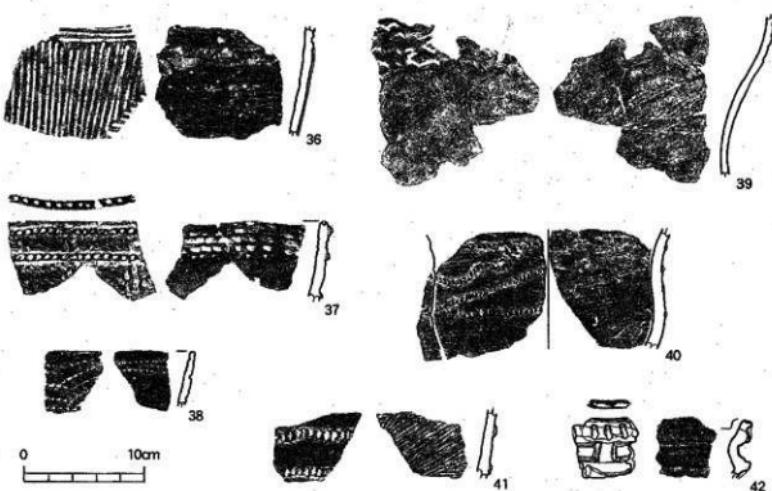
15 類土器 (第11～15図 43～82)

外面に凹線文を施すものである。文様や器形により5類に細分した。

a 類 (43～48・50～53) : 凹線文のみ施すもの。

b 類 (54～61) : 口縁部上位に凹点文や刺突文を施すもの。

c 類 (49・62～68) : 口縁部上端に粘土を貼付することにより肥厚させ、そこに凹点文や刺突文を施すもの。



第10図 10~14類土器

d類 (69~76) : 口縁部上位に貝殻刺突文を施すもの。器形には、口縁部が直行するものと頸部が縮まり、胴部が張るもの2種類が認められる。

e類 (77~82) : 口縁端部外面に刻みを施すもの。器形にはd類同様、2種類ある。

16類土器 (第16~18図 83~131)

外面に縦形凹線文、または沈線文を施すものである。胎土に金雲母を含むものが多い。器形や文様により、9類に細分した。

a類 (83~93) : 口唇部に沈線文を施すもの。連点文を付加するものもある。また、口縁部が肥厚し、そこに円文や連点文を施すものもある。

b類 (94~98) : 口縁部が内湾または内反するもの。口縁部上端に円文や連点文を施す。

c類 (99~100) : 突唇を施すもので、突唇上に円形刺突文を施す。

d類 (101~114) : 口縁部が外反するもの。

e類 (115~117) : 口縁部上端に貝殻刺突文や刺突文を施すもの。

f類 (118~122) : 口縁部が直行またはやや内湾するもの。

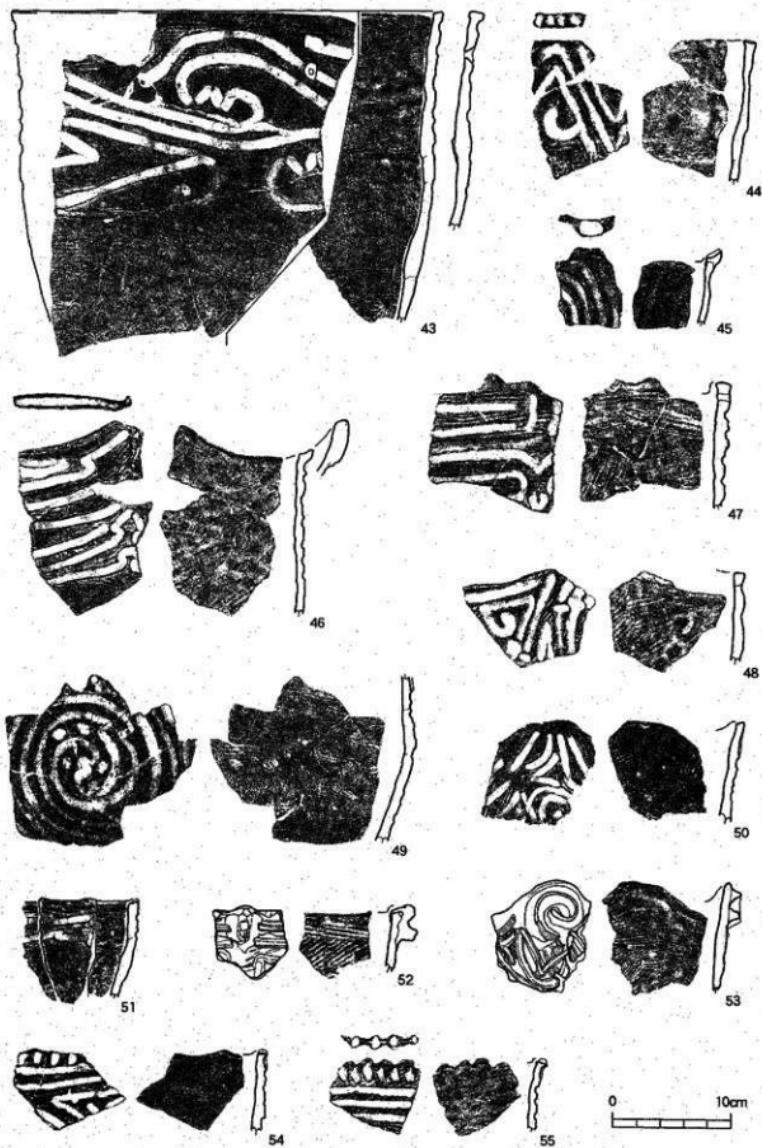
g類 (123~127) : 文様が口縁部の上位に集約されているもの。

h類 (128~130) : 突起や把手などの装飾がみられるものを一括した。

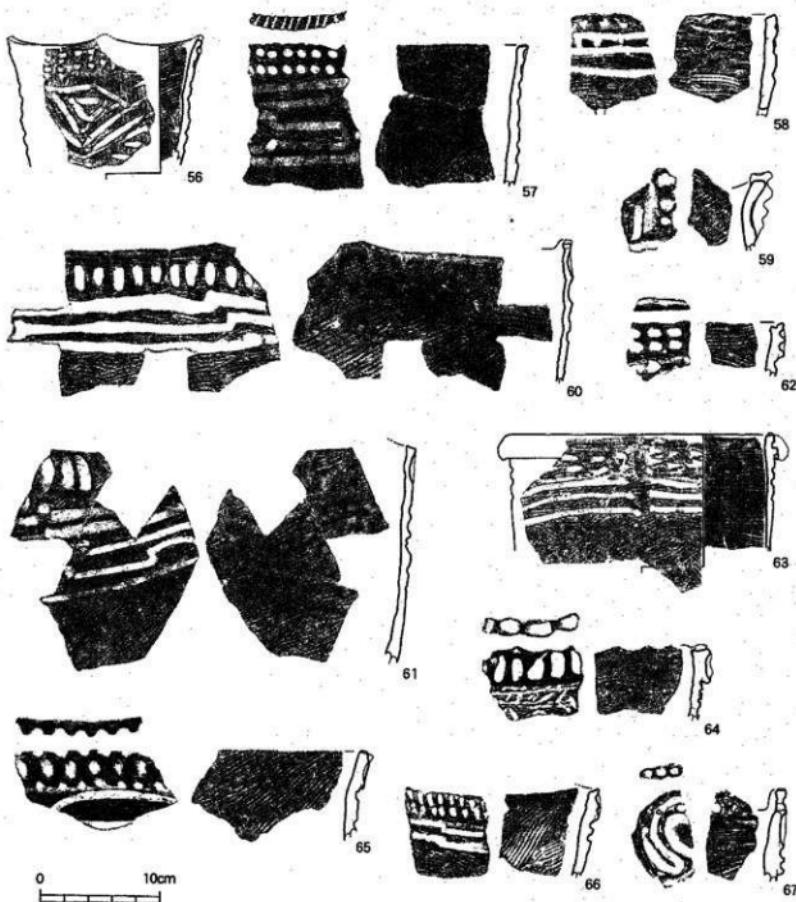
i類 (131) : 内外面に粘土を貼付した補修痕がみられる胴部である。焼成前に入ったヒビを粘土で糊でつけることにより補修を行ったと考えられる。その補修により、外面文様が消されている。

17類土器 (第18・19図 132~147)

凹線文や沈線文間に貝殻刺突文や連点文を施すものである。胎土に金雲母を含むものが多い。



第11図 15類土器 (1)

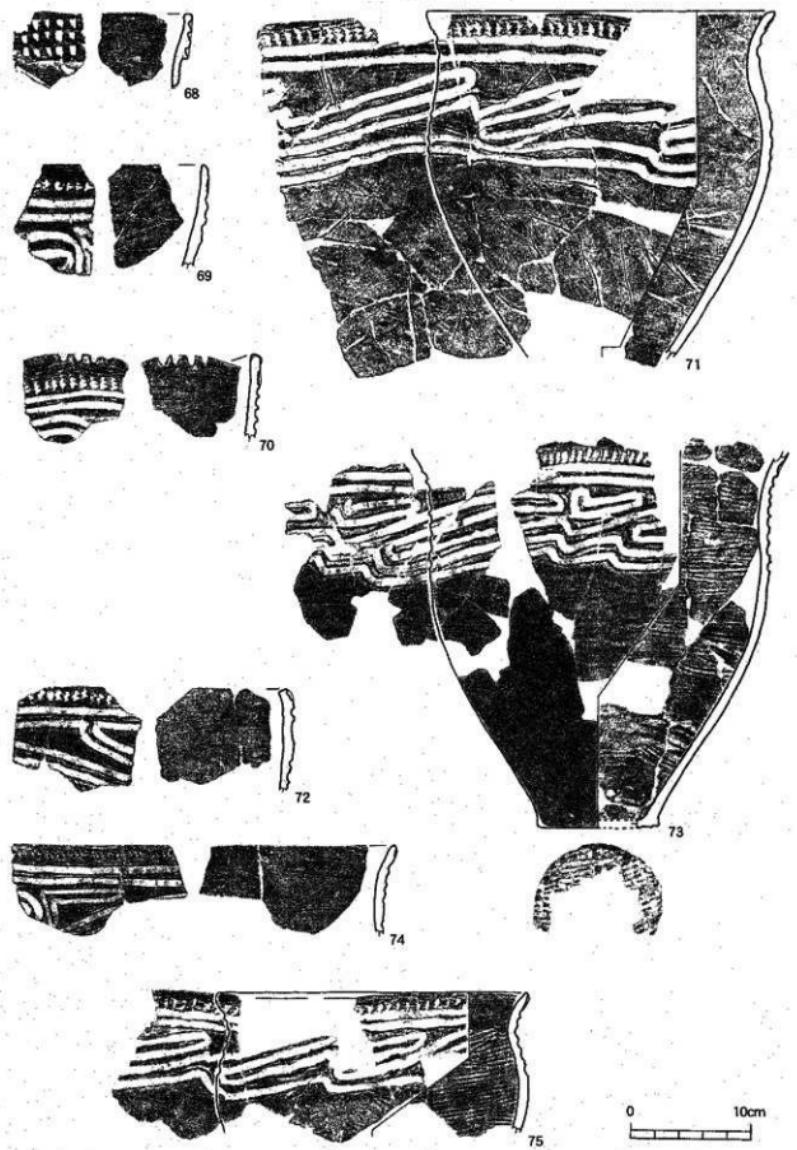


第12図 15類土器 (2)

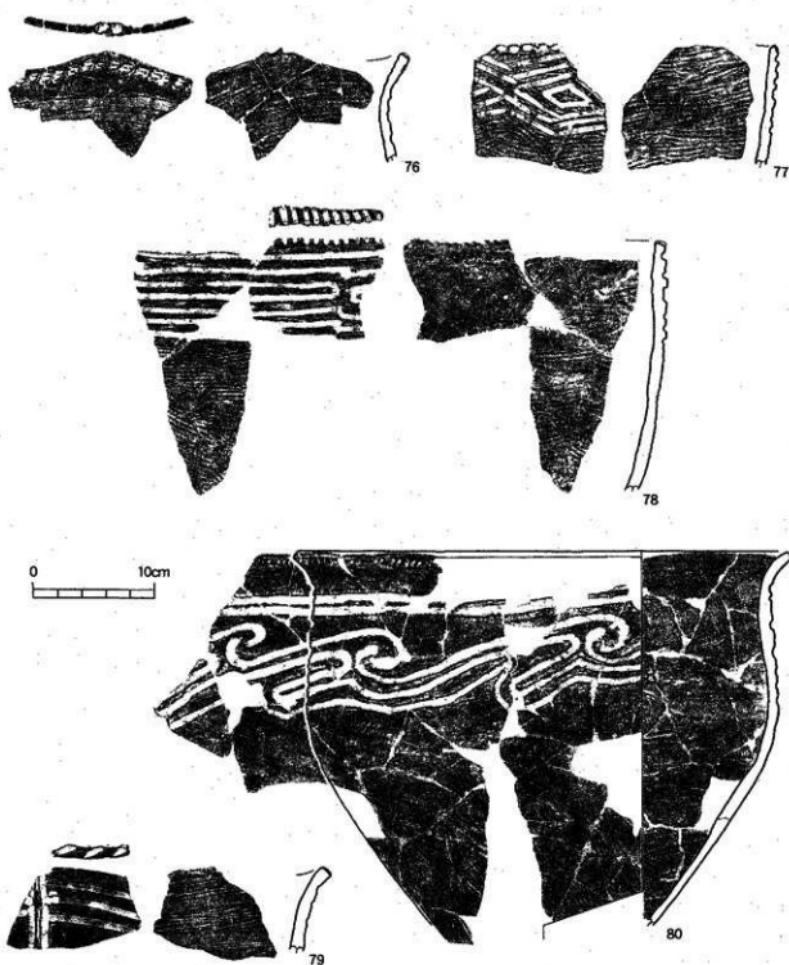
18類土器 (第20~22図 148~182)

口縁部が肥厚し、断面形が三角形もしくは「く」字状を呈するもので、その部分に貝殻刺突文や爪形文、沈線文、連点文を施す。また、胸部や口縁部内面に施文されるものもある。平口縁と波状口縁が認められる。器形や文様により、4類に細分した。

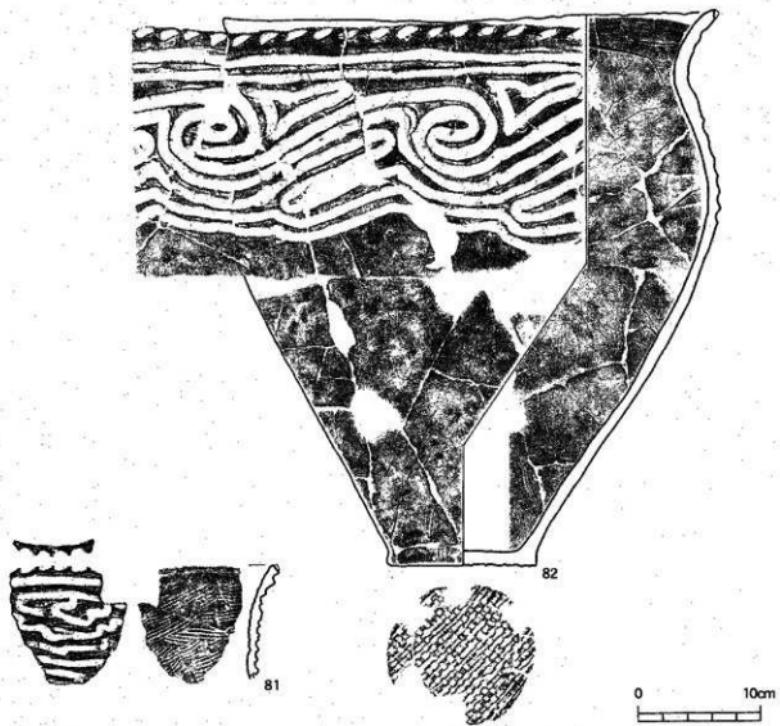
a類 (148~157)：口縁部断面が三角形を呈するもの。肥厚部の上位にのみ施文されるものがほとんどであるが、下位にも施文されるものもある。



第13図 15類土器 (3)



第14図 15類土器 (4)



第15図 15類土器 (5)

b類 (158~166)：口縁部断面が「く」字状を呈し、肥厚部の下位に文様が認められないもの。

c類 (167~181)：口縁部断面が「く」字状を呈し、肥厚部の下位にも施文されるもの。貝殻刺突文や沈線文、凹線文を施す。

d類 (182)：口縁部断面が「く」字状を呈し、無文のもの。

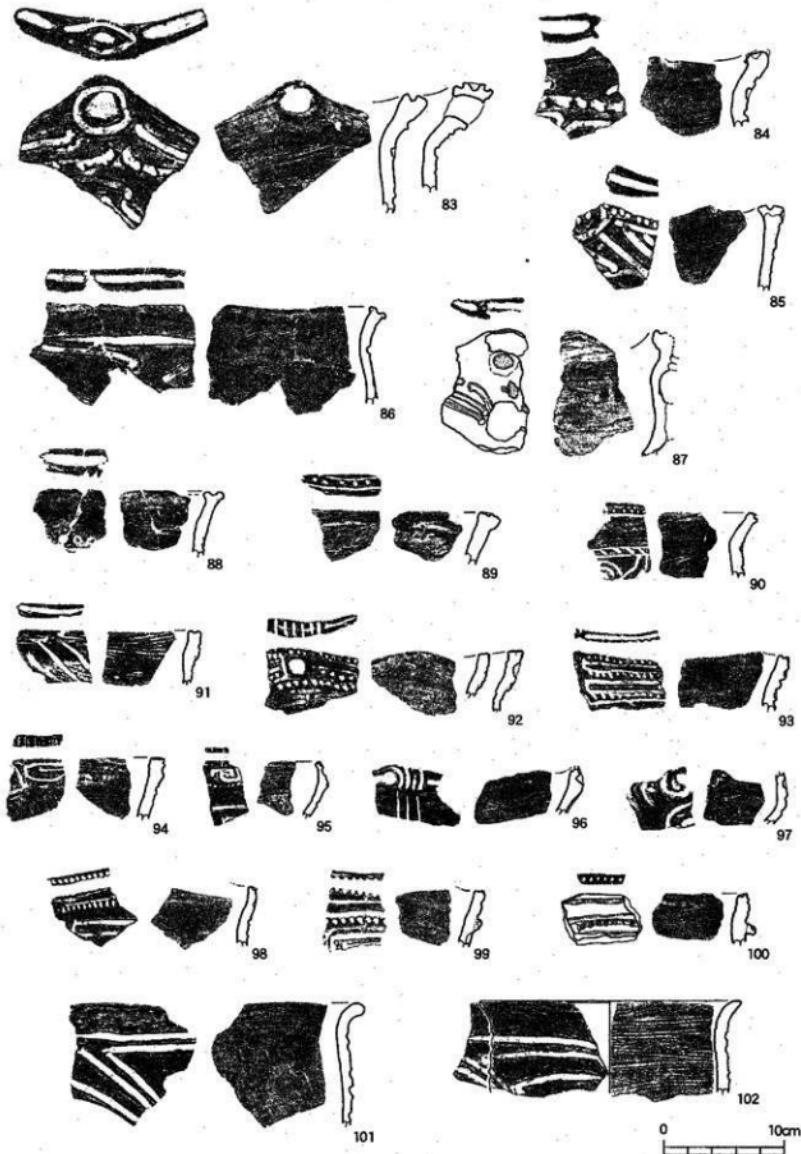
19類土器 (第23~25図 183~205)

口縁部に斜位の貝殻刺突文を1段または2段施せるものである。波状口縁を呈するものが多い。内外面ともに貝殻条痕を施す。器形や文様により、2類に細分した。

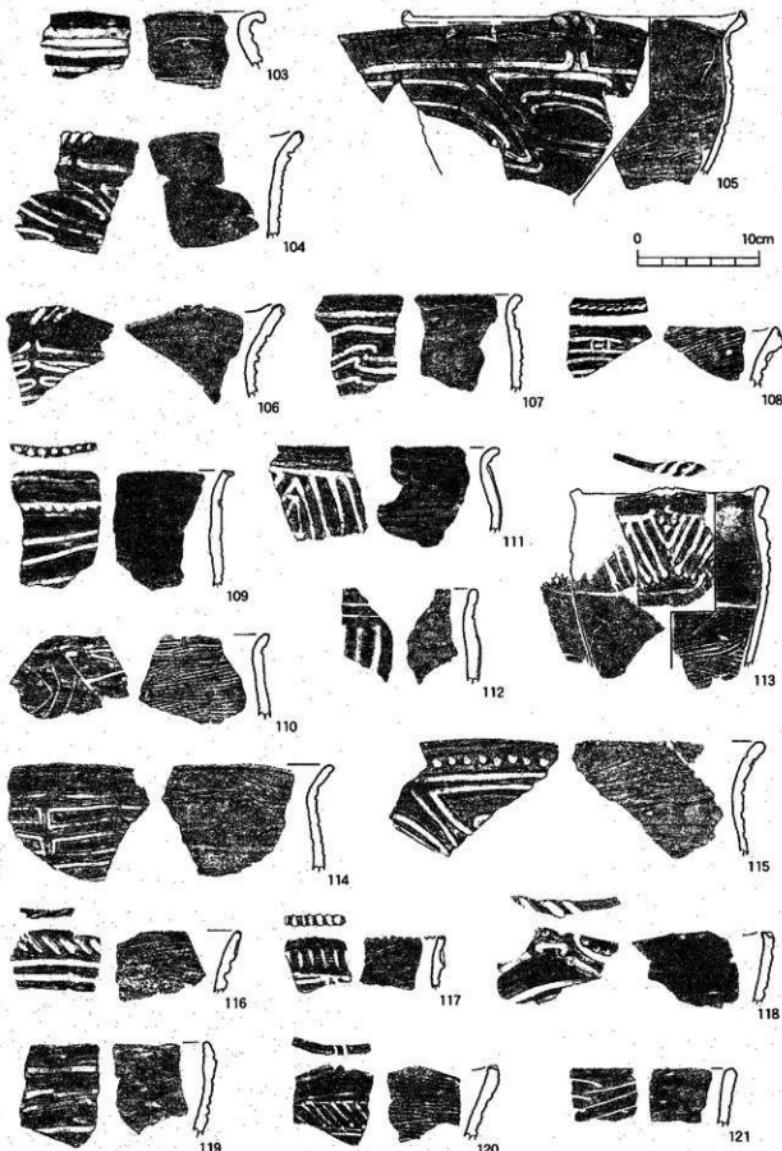
a類 (183~192)：口縁部断面が「く」字状に屈曲するもの。沈線文や弧状の短沈線文を連続させるもの（連続弧状短沈線文）を付加するものもある。

b類 (193~203)：口縁部が外反するもの。壺形を呈するものもある。

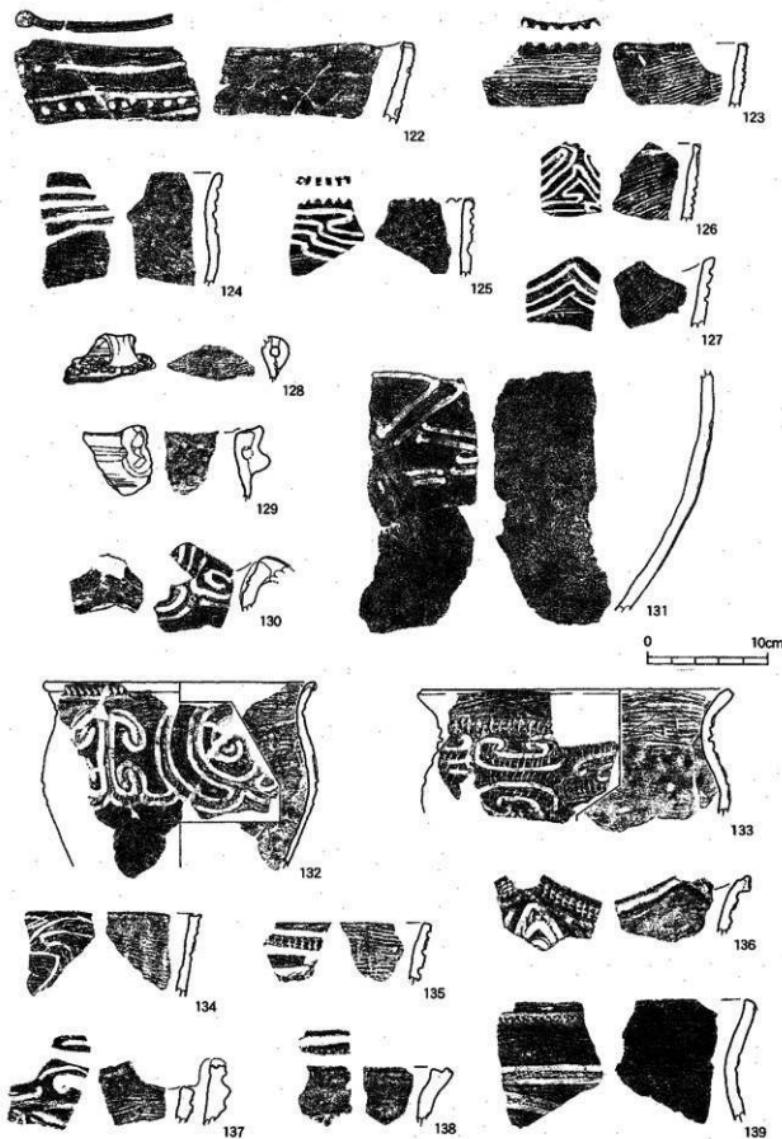
c類 (204・205)：無文のもの。



第16圖 16類土器 (1)



第17図 16類土器 (2)



第18図 16・17類土器



第19図 17類土器

20類土器 (第25図 206~210)

口縁部が外反し、頸部で縮まり、胸部が膨らむ器形を呈し、口縁～胸部上半に爪形文や沈線文、貝殻刺突文を施すものである。口縁端部がやや肥厚するものや口縁部に突起などの装飾をもつものも認められる。

21類土器 (第25・26図 211~216・220)

口縁部が内湾もしくは直行し、胸部が張る器形を呈し、口縁部と胸部に貝殻刺突文と沈線文を施すものである。19類土器でみられるような連続弧状沈線文を施すものもある。波状口縁を呈するものもあり、波頂部に刻みを有する。19類土器とは異なり、ナデ調整または貝殻条痕後ナデ調整を行う。

22類土器 (第25・26図 217~219・221~226)

口縁部が内湾もしくは直行し、胸部が張る器形を呈し、口縁部や胸部に貝殻刺突文や沈線文、連続弧状短沈線文などを施す。沈線間に貝殻刺突文を施すような擬似縄文もみられる。ナデ調整、もしくはミガキに近いナデ調整を行っており、貝殻条痕は認められない。

23類土器 (第26図 227~240)

いわゆる台付皿形土器を一括した。沈線文や貝殻刺突文を施しただけの平面的な装飾をもつものと、粘土紐などを貼付することで立体的な装飾をもつものが認められる。粘土紐貼付には「W」字状や「S」字状のものがある。器面に赤色顔料や白色顔料を塗布するものも認められる。

24類土器 (第27・28図 241~275)

いわゆる唐消繩文土器を一括したものである。器形や文様により、9類に細分した。

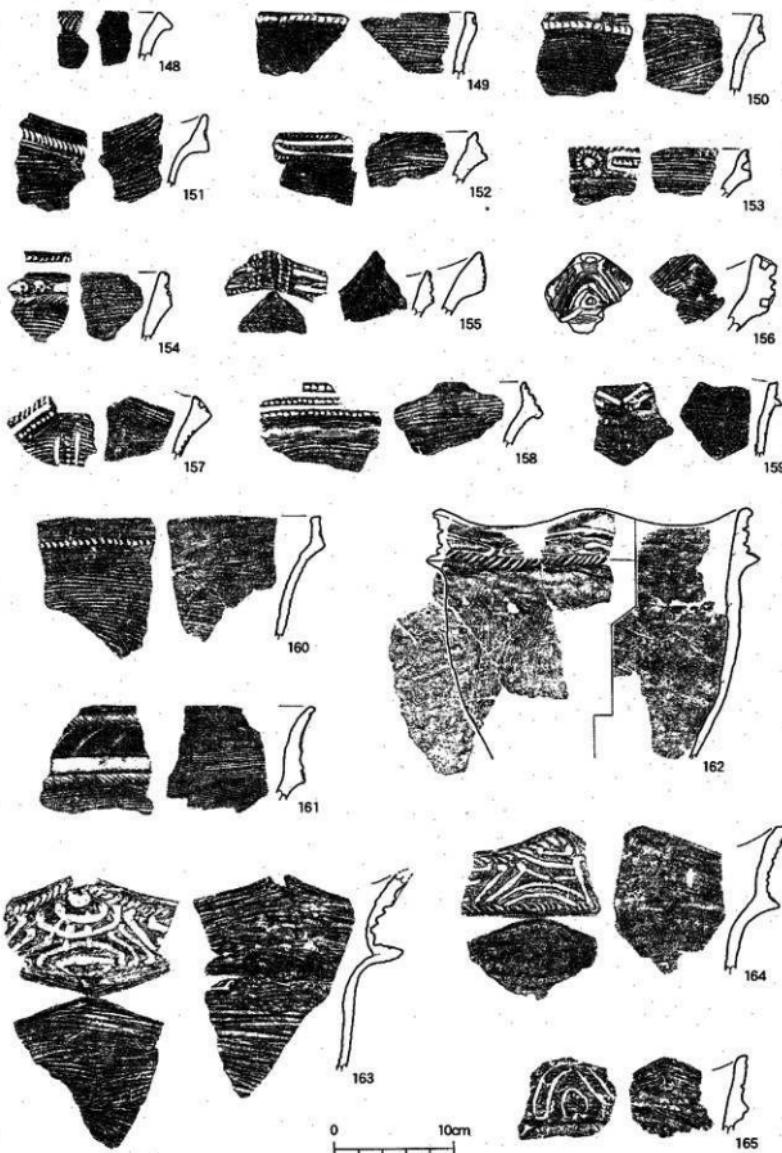
a類 (241~244) : 口唇部に太めの沈線を巡らせるもの。

b類 (245・246) : 胸部が大きく張る器形を呈し、幅広の平坦な口唇部に沈線文と刺突文を施すもの。

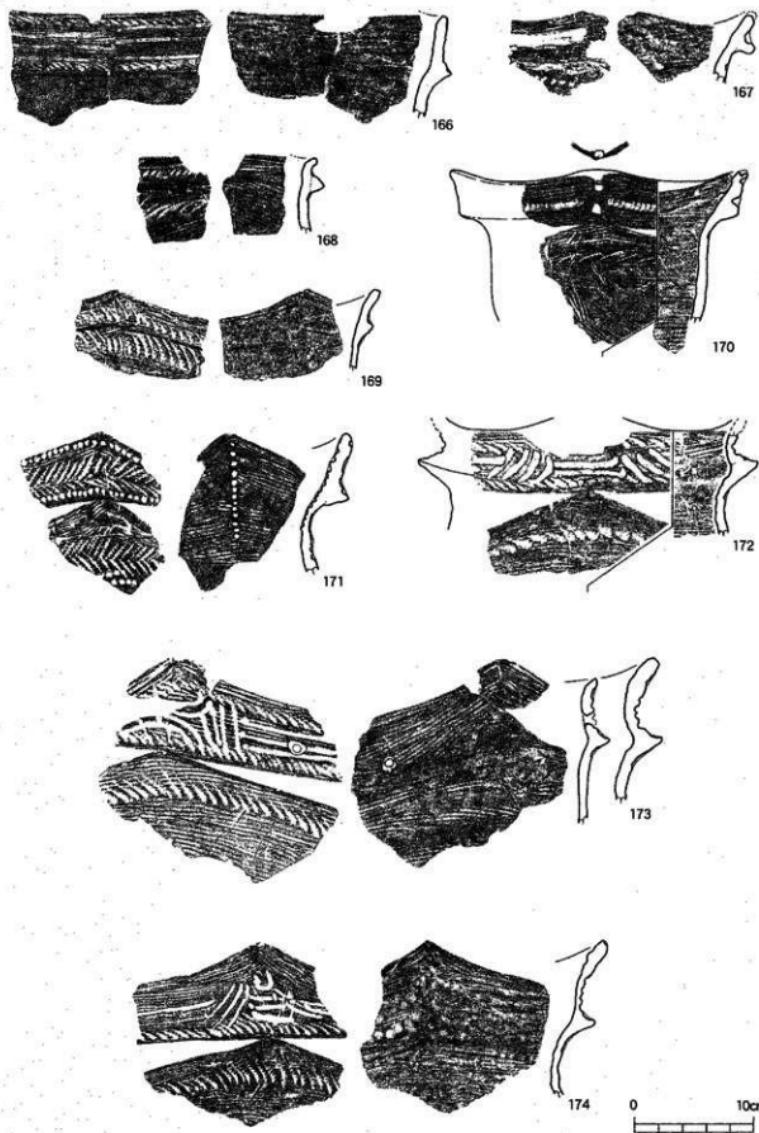
c類 (247~254) : 口縁部がやや肥厚し、口縁端部外面に貝殻刺突文(貝殻擬似縄文)や鋸歯状の文様を施すもの。大きく張り出す胸部をもつ鉢形土器もあり、口縁端部と胸部に縄文を施す。また、口縁部に「S」「W」字状の粘土紐を貼付するものや複数の穿孔をもつ突起も認められる。

d類 (255~259) : 口縁部が緩やかに立ち上がり、頸部で緩やかに屈曲する器形を呈し、口縁部と胸部に唐消繩文を施すもの。沈線文のみのものもある。口縁部に3本の沈線文を、頸部屈曲部には刺突点文を巡らせる。

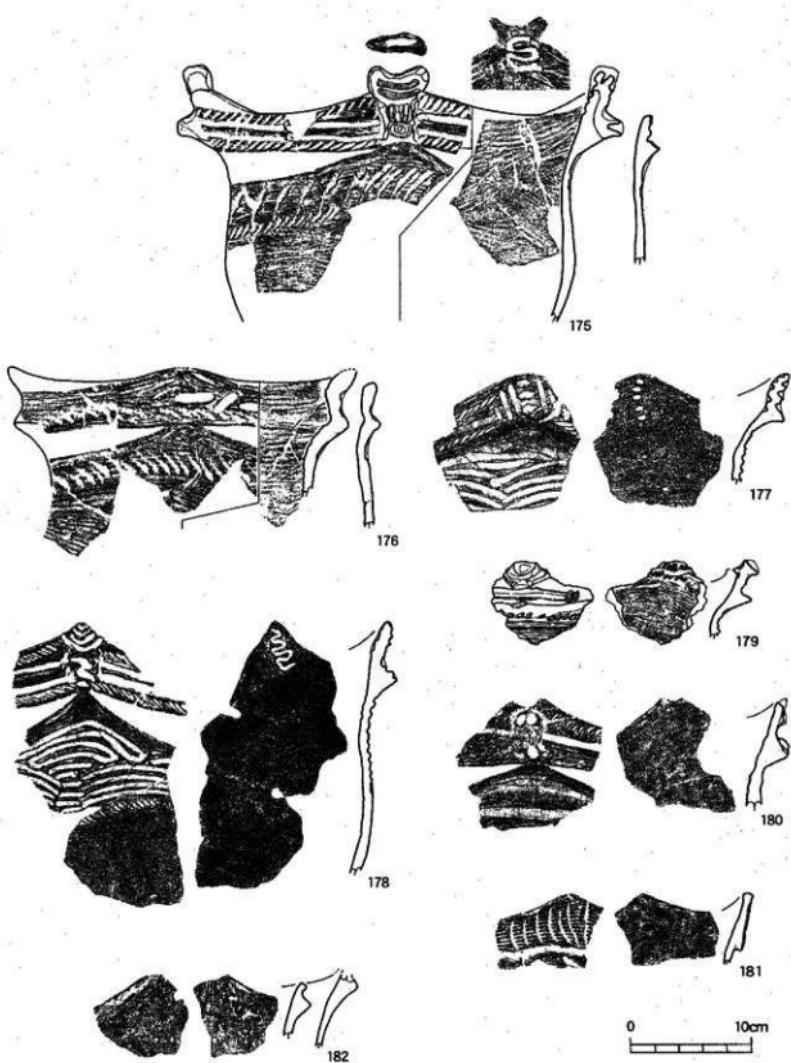
e類 (260~265) : 口縁部が「く」字状に立ち上がり、頸部が鋭く屈曲する器形を呈し、口縁部と胸部に唐消繩文を施すもの。沈線文のみのものもある。口縁部に2~3本の沈線文を巡らせる。口縁波頂部直下や胸部に対向弧文を付加する。波頂部に「V」字状の切り込みをもつ。



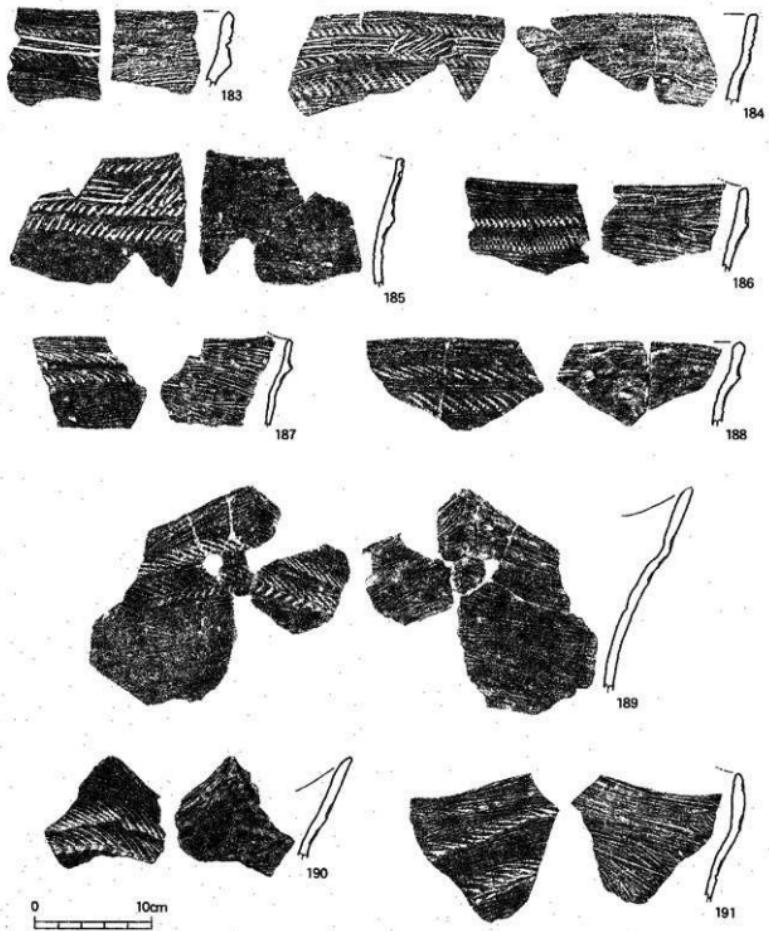
第20図 18類土器 (1)



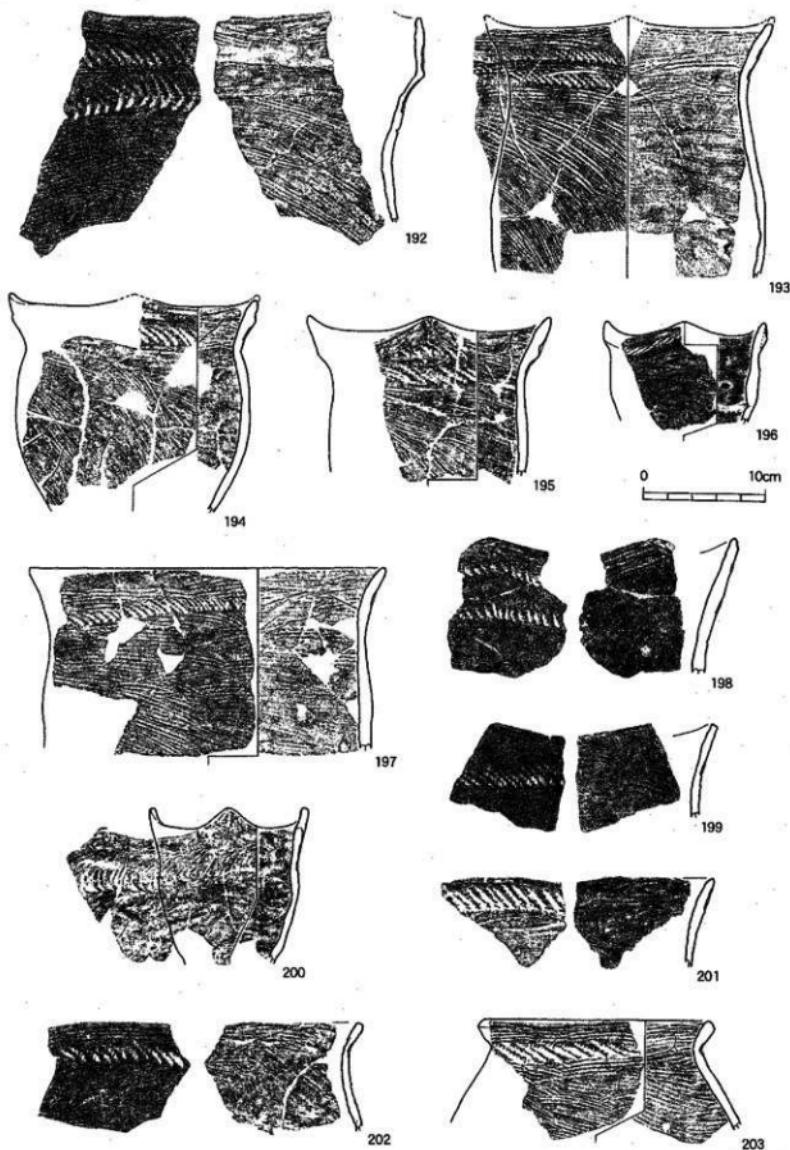
第21図 18類土器 (2)



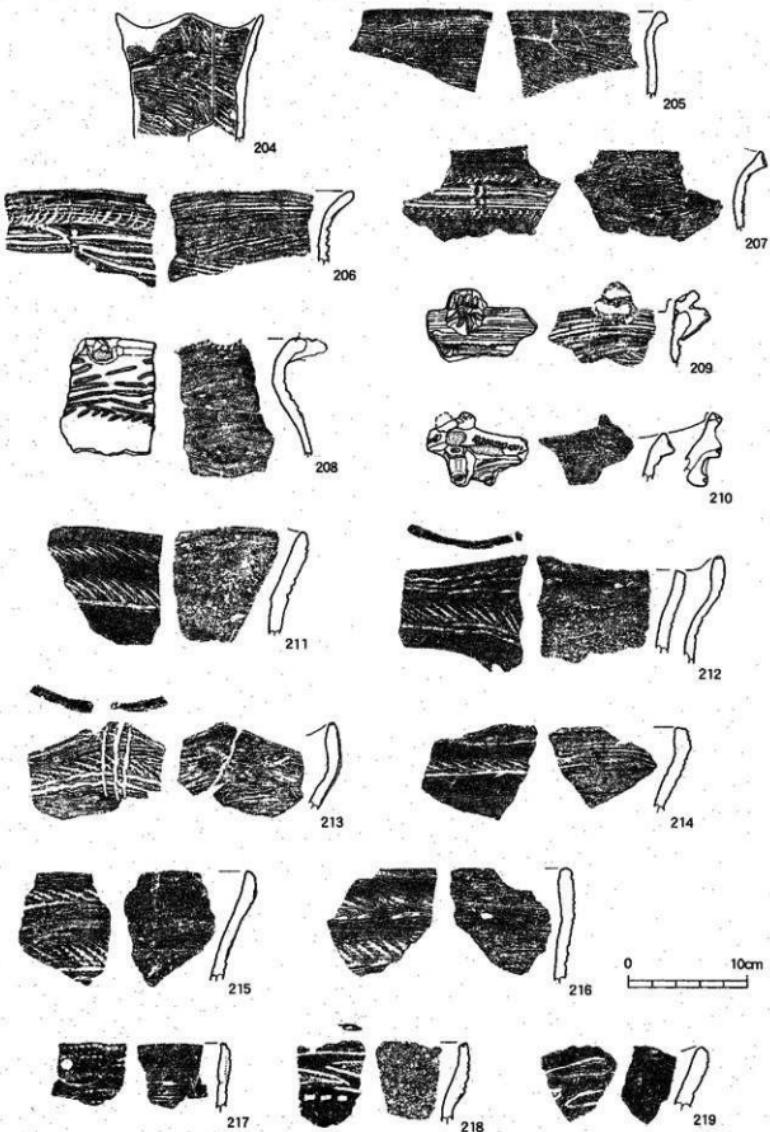
第22図 18類土器 (3)



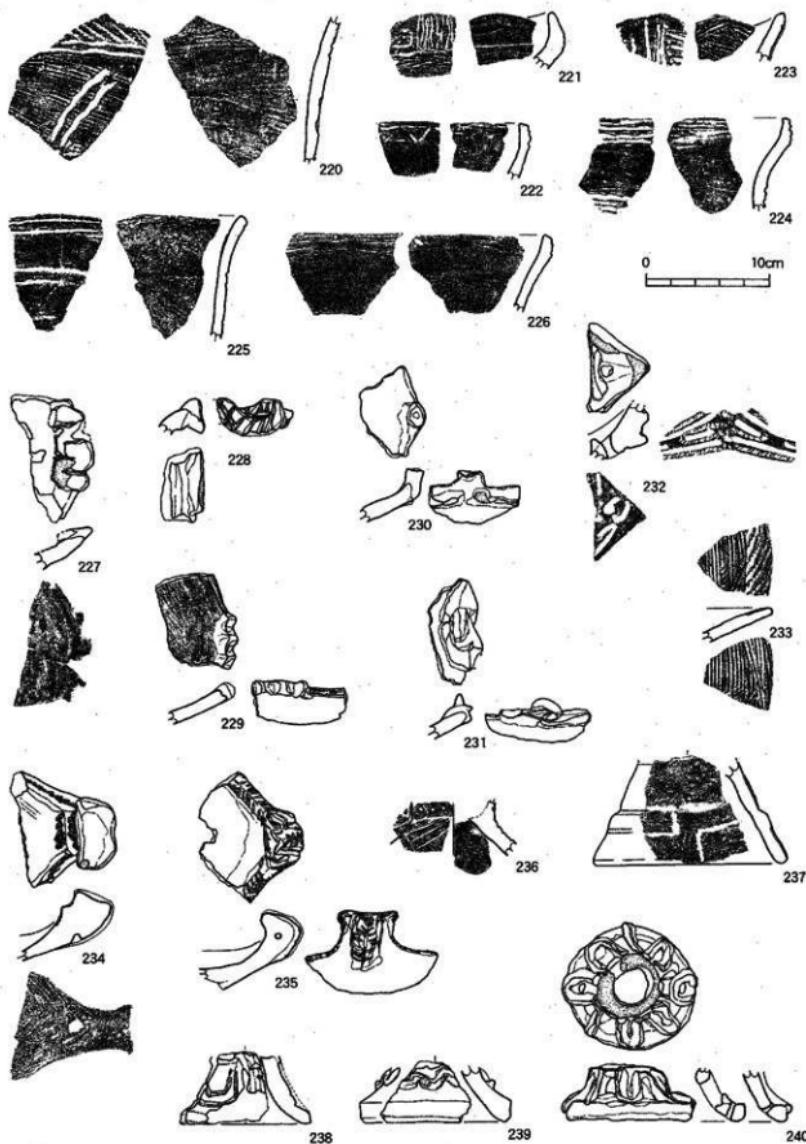
第23図 19類土器 (1)



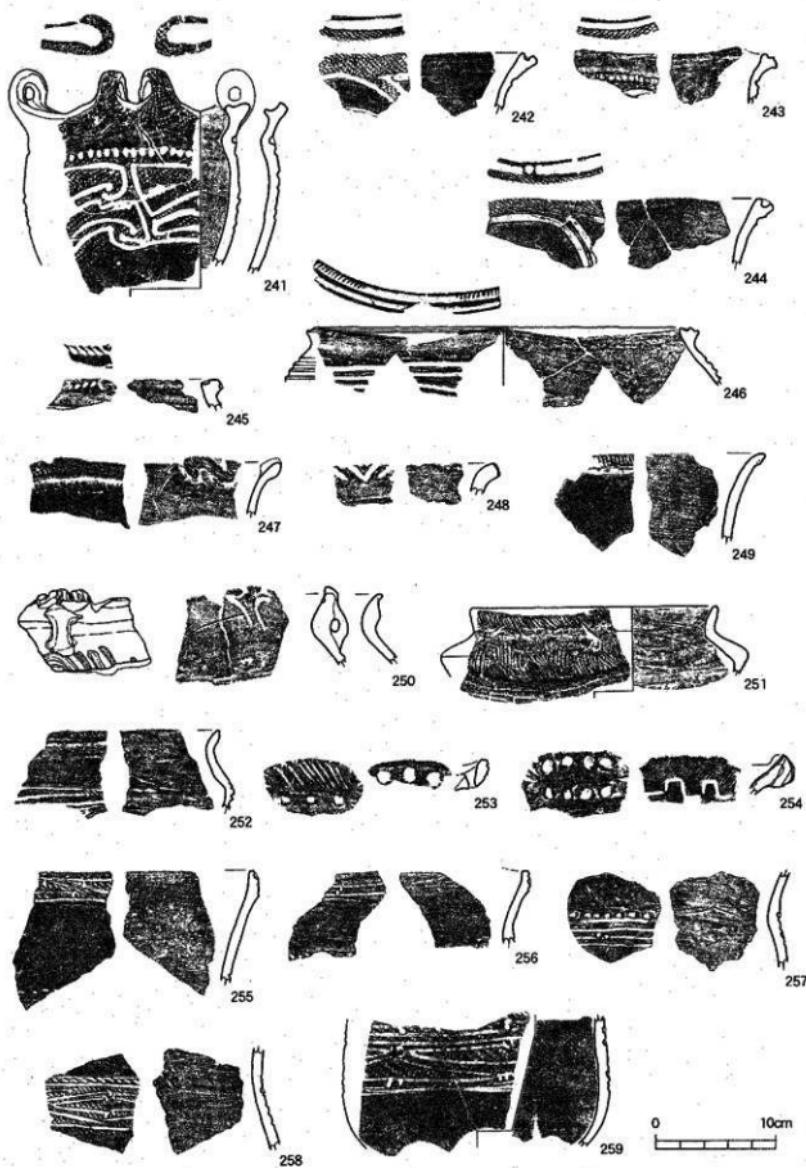
第24図 19類土器 (2)



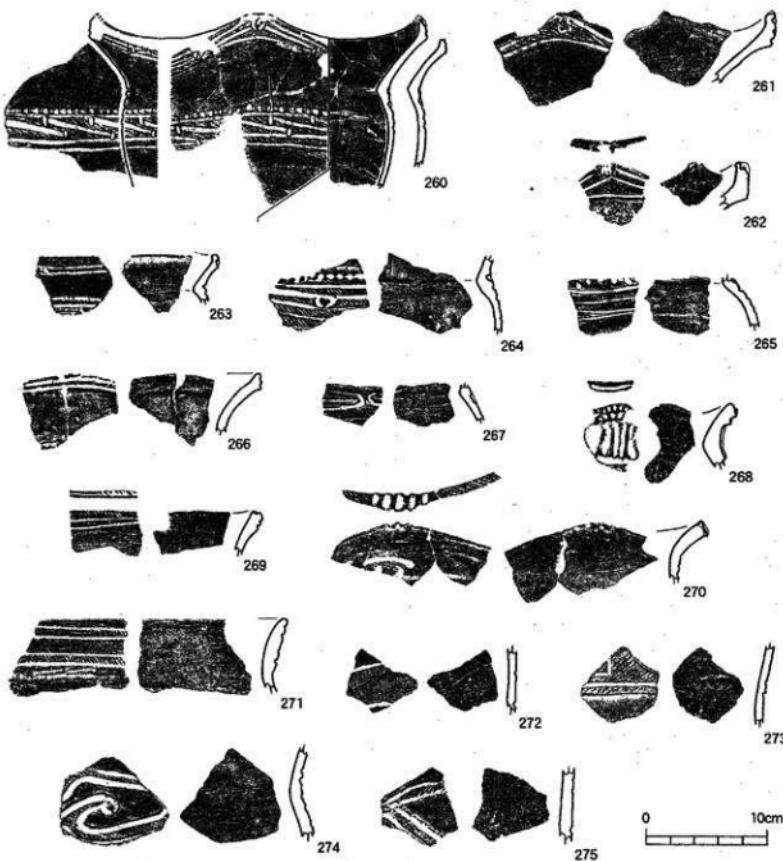
第25図 19~22類土器



第26図 22・23類土器



第27図 24類土器 (1)



第28図 24類土器 (2)

f類 (266・267)：口縁部が緩やかに立ち上がり、口縁部外面に2本の沈線文を這らせ、胴部に「X」字状の刺突文を施すものである。

g類 (269・271)：外反し、やや肥厚する口縁部に磨消繩文を施すものである。内外面ともにミガキ調整を行う。外面に赤色顔料が認められる。

h類 (268・270)：a～g類に含まれない口縁部を一括した。

i類 (272～275)：磨消繩文が施される胴部を一括した。

25 類土器 (第29~32図 276~328)

内外面ともにミガキまたは丁寧なナデ調整を行い、器壁が厚手のものである。主に口縁部が外傾し、胸部が張る器形を呈する。器形や文様により、8類に細分した。

a類 (276~287) : 口縁部が無文のもの。胸部に沈線文や凹線文を巡らせるものや施文されるものもある。

b類 (288~300) : 口縁部に凹線文を巡らせ、内面に段を有するもの。凹点文や逆「U」字状凹線文を付加するものもある。口唇部は平坦なものと丸みをもつものが認められる。凹線の施文が浅いものもある。

c類 (301~309) : 口縁部が凹線文を巡らせ、内面に段をもたないものの。b類同様、凹点文や逆「U」字状凹線文を付加するものもある。

d類 (310~313) : 口縁部に沈線文を巡らせるもの。

e類 (314・315) : 口縁端部が肥厚し、凹線文や沈線文がみられないもの。

f類 (316・317) : 口縁部が内湾し、無文のもの。

g類 (318~326) : 脚部を一括した。凹線文を巡らせるだけのものや沈線文や連点文、逆「U」字状の凹線文を付加するものもある。

h類 (327・328) : 外傾する口縁部からそのまま底部に至る、砲弾形を呈するもの。

26 類土器 (第32図 329~336)

口縁部が「く」字状に屈曲し、屈曲部上位に沈線文や凹線文を数条巡らせるもの。口縁部形態には直行するものと内傾するものとが認められる。凹線文間は稜線状となる。胸部に数条の沈線文を巡らせるものや浅鉢形を呈するものも認められる。

27 類土器 (第33~35図 337~381)

後期に属すると考えられる底部を一括した。器形や底部圧痕の有無などにより、6類に細分した。

a類 (337~342) : 平底で、底部圧痕が認められないもの。

b類 (343~359) : 平底で、底部圧痕が認められるもの。底部圧痕には編物や木の葉、貝殻条痕がある。なお、底部圧痕をナデ消すものもある。

c類 (360~365) : 上げ底、または脚台をもつもの。

d類 (366・367) : a~c類に含まれると考えられるもので、製作技法が分かるもの。

e類 (368~376) : 内外面にミガキ調整または丁寧なナデ調整を行い、平底や小平底、上げ底を呈するもの。器壁が厚く、重量感がある。

f類 (377~381) : 内外面にミガキ調整または丁寧なナデ調整を行い、平底や上げ底を呈するもの。e類よりも器壁が薄く、平べったい感がある。

28 類土器 (第36図 382~401)

晩期に属すると考えられるもので、器面調整により、3類に細分した。

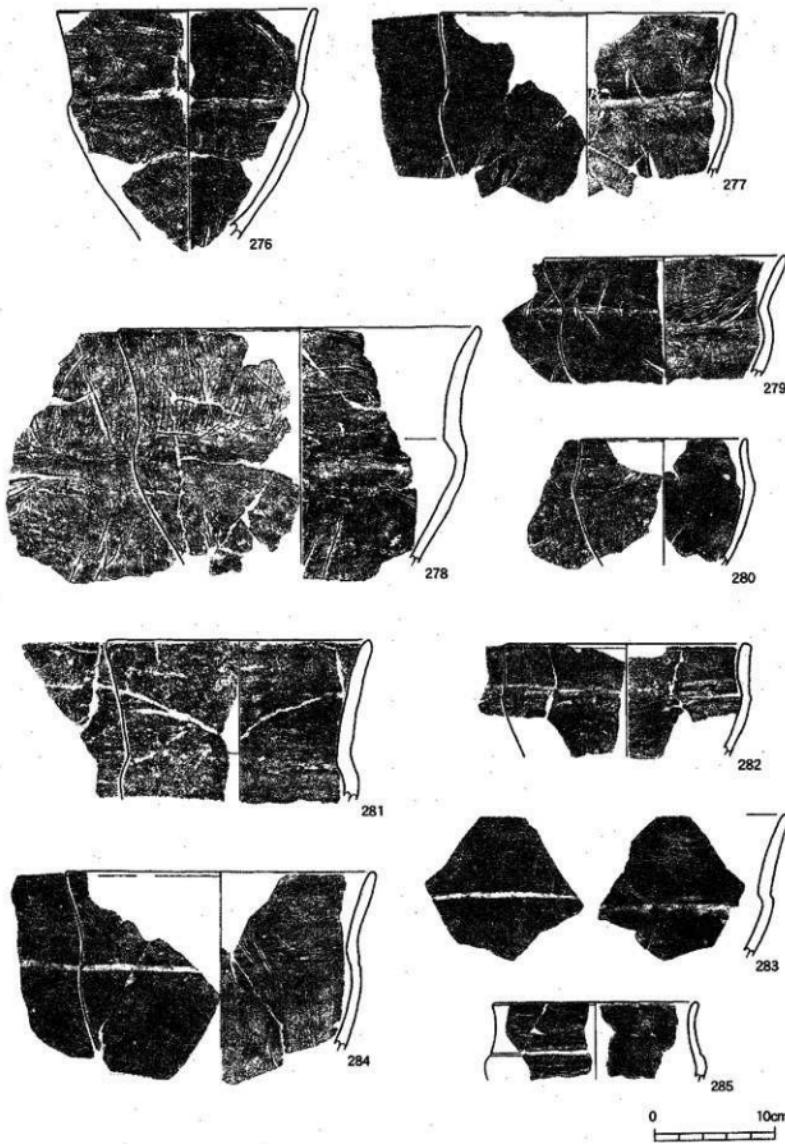
a類 (382~390) : 内外面ともに条痕調整やナデ調整を行うもので、深鉢形を呈する。口縁端部が肥厚するものや口縁端部に突帯を巡らせるものも認められる。底部は張り出しをもつ。

b類 (391~396) : 脚~底部外面に組織痕が認められるもの。内面はミガキまたは丁寧なナデ調整を行う。組織痕には網目や編布がみられる。

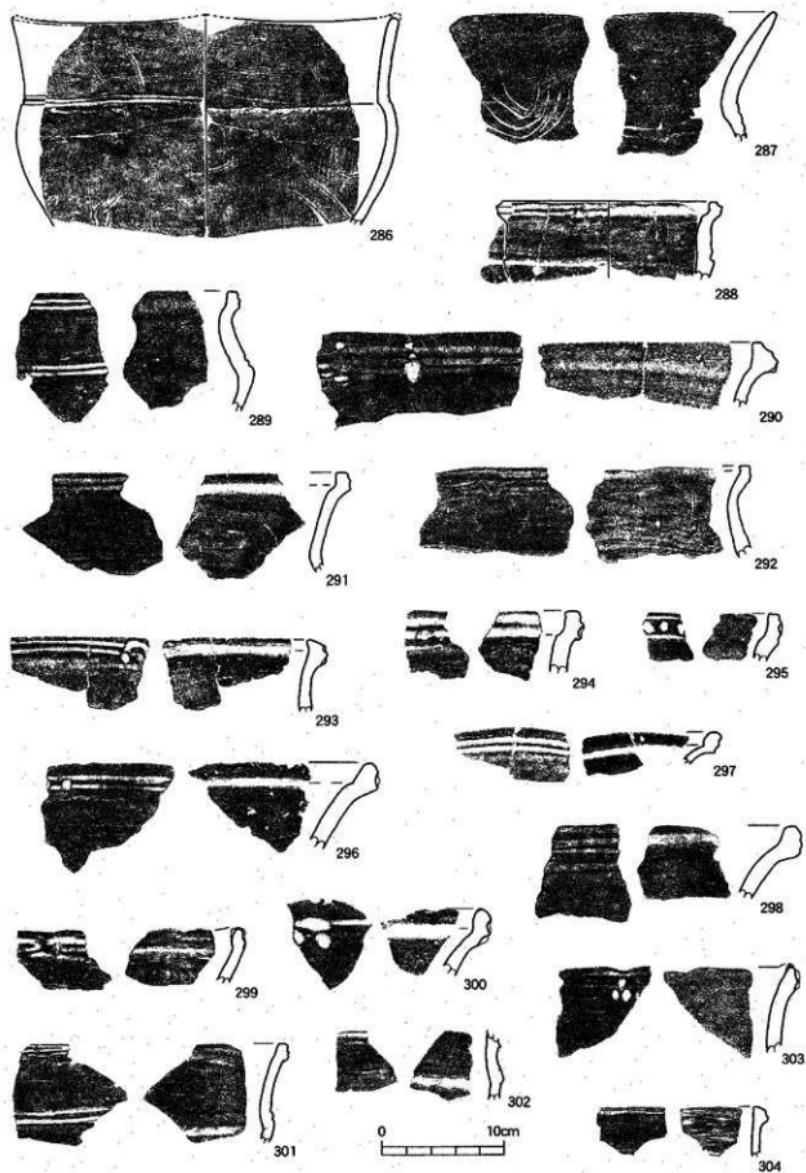
c類 (397~401) : 内外面ともにミガキ調整を行うもので、浅鉢形を呈する。

29 類土器 (第36・37図 402~405)

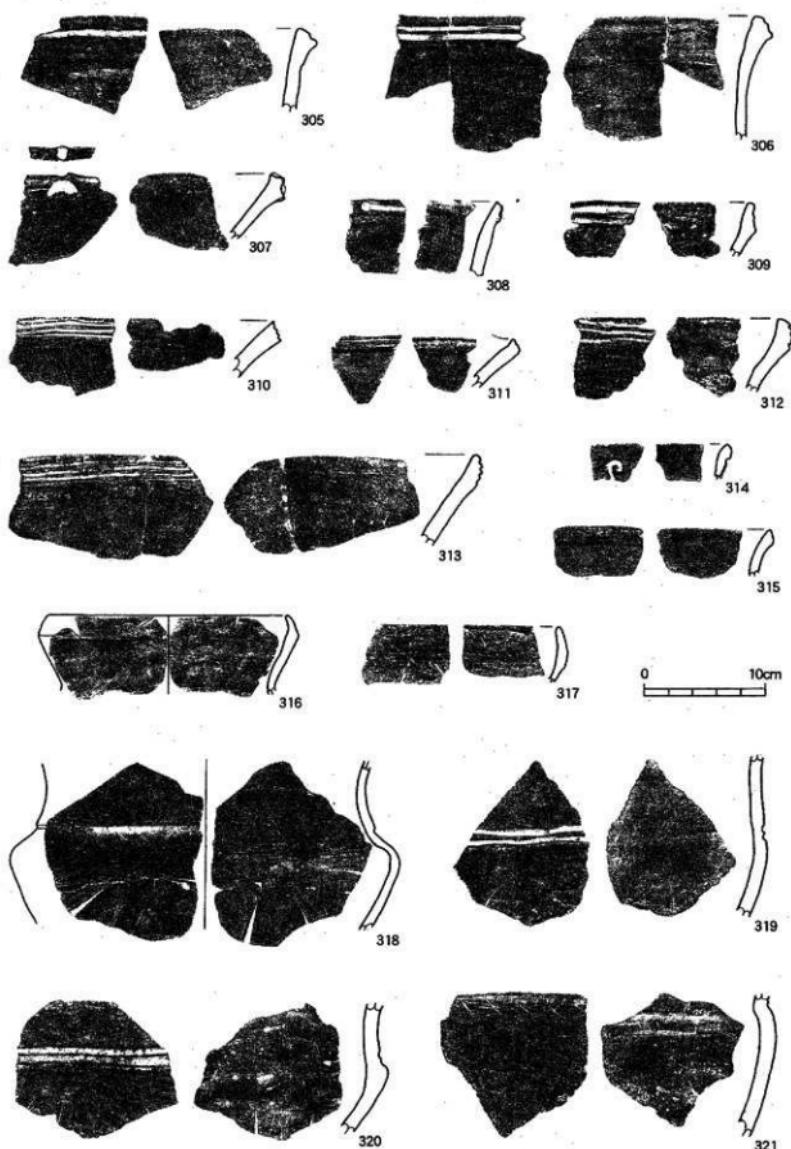
口縁端部と胸部屈曲部に刻目突帯を巡らせるもの。口縁端部のみに施すものもある。突帯は断面三角形を呈している。



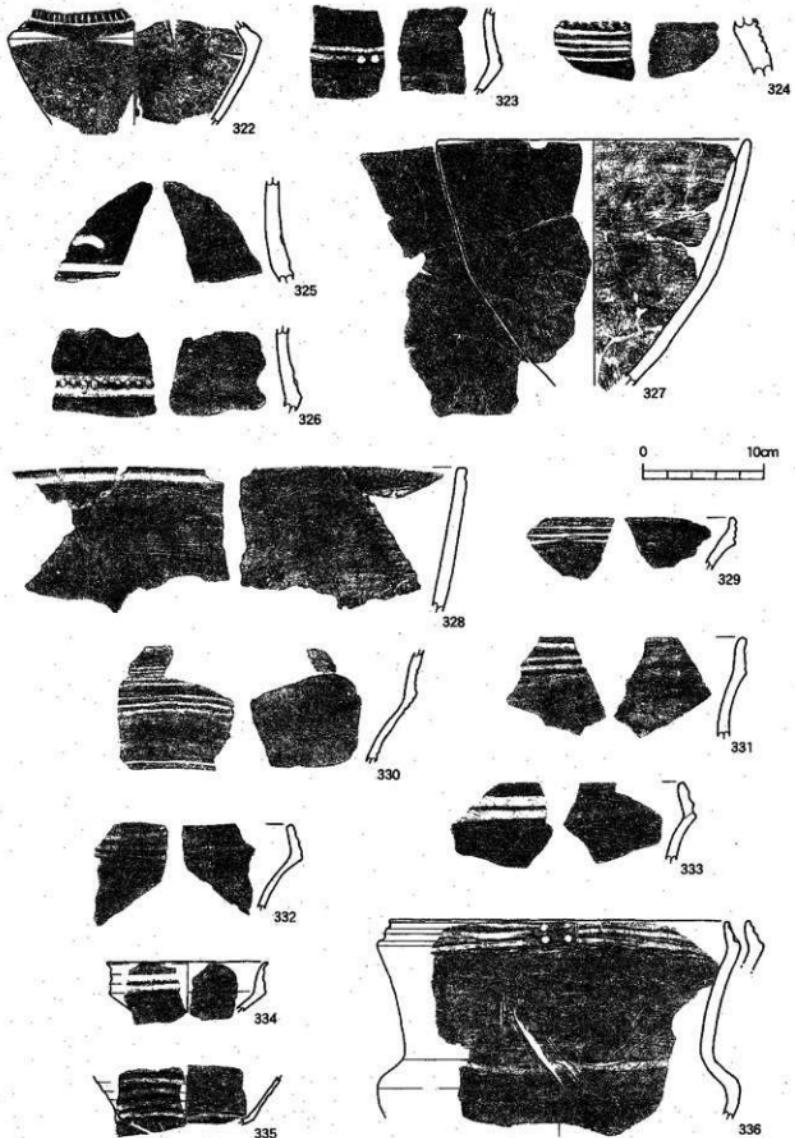
第29図 25類土器 (1)



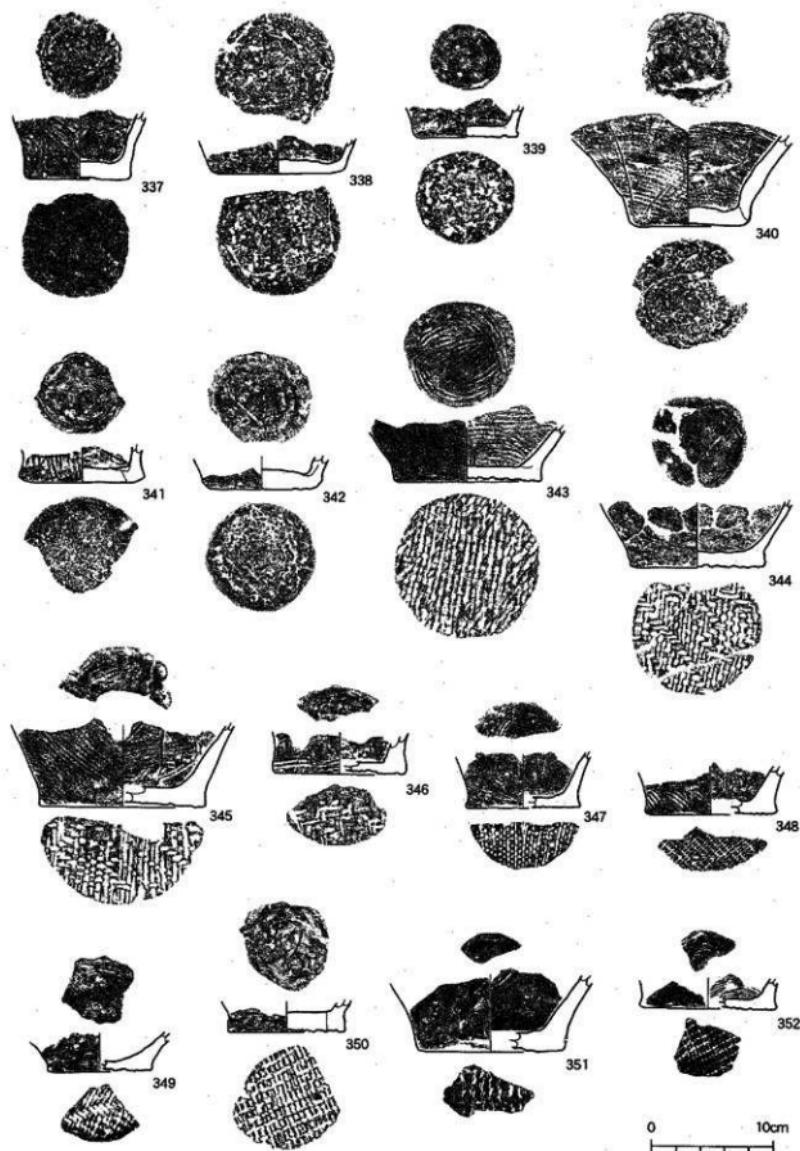
第30図 25類土器 (2)



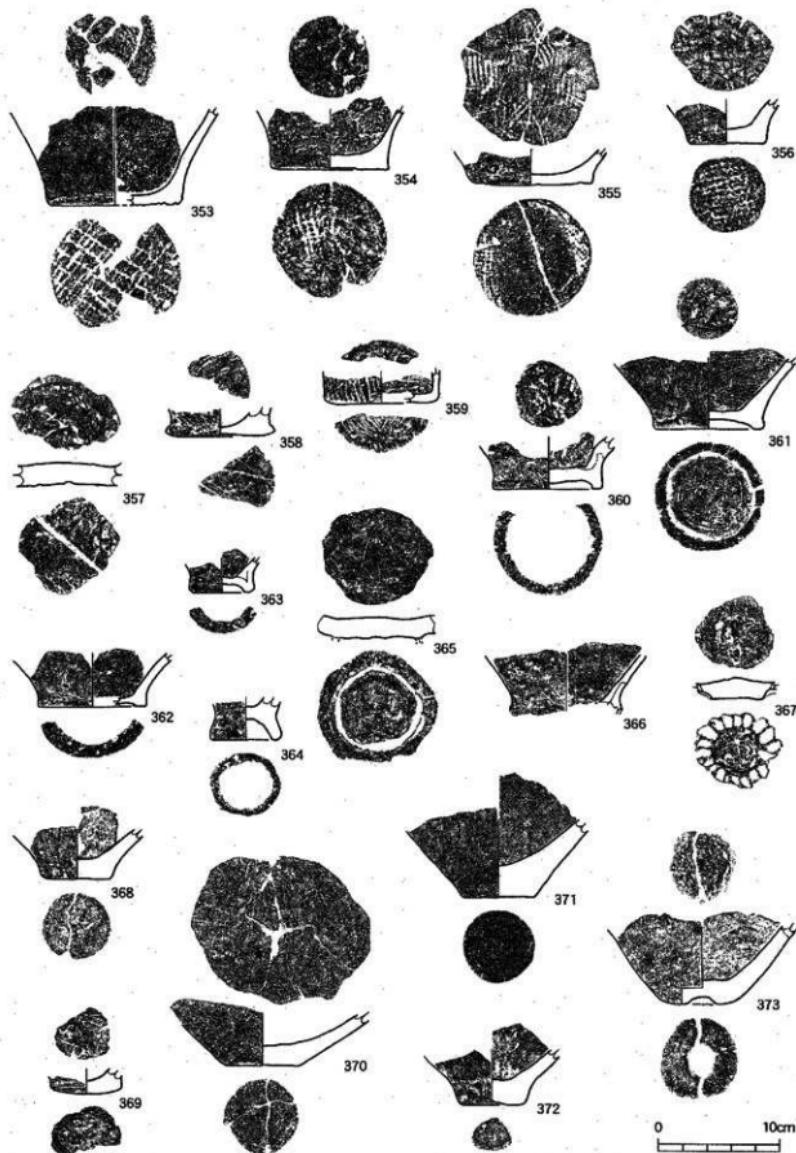
第31図 25類土器 (3)



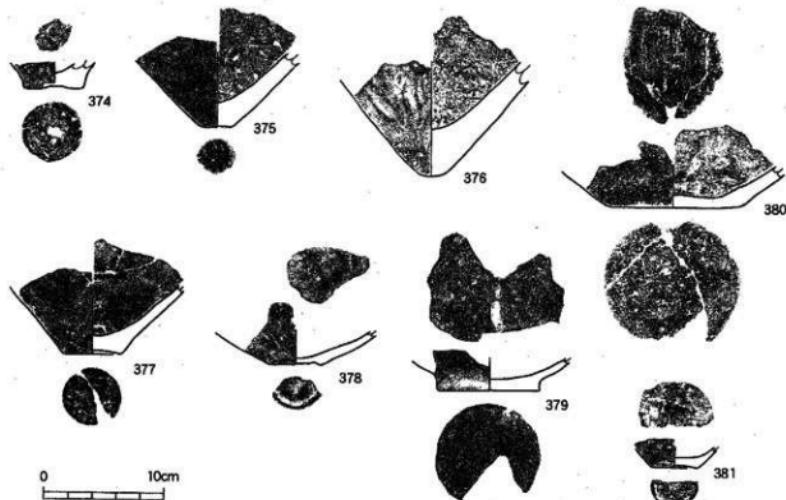
第32図 25・26類土器



第33図 27類土器 (1)



第34図 27類土器 (2)



第35図 27類土器 (3)

30類土器 (第37図 406~409)

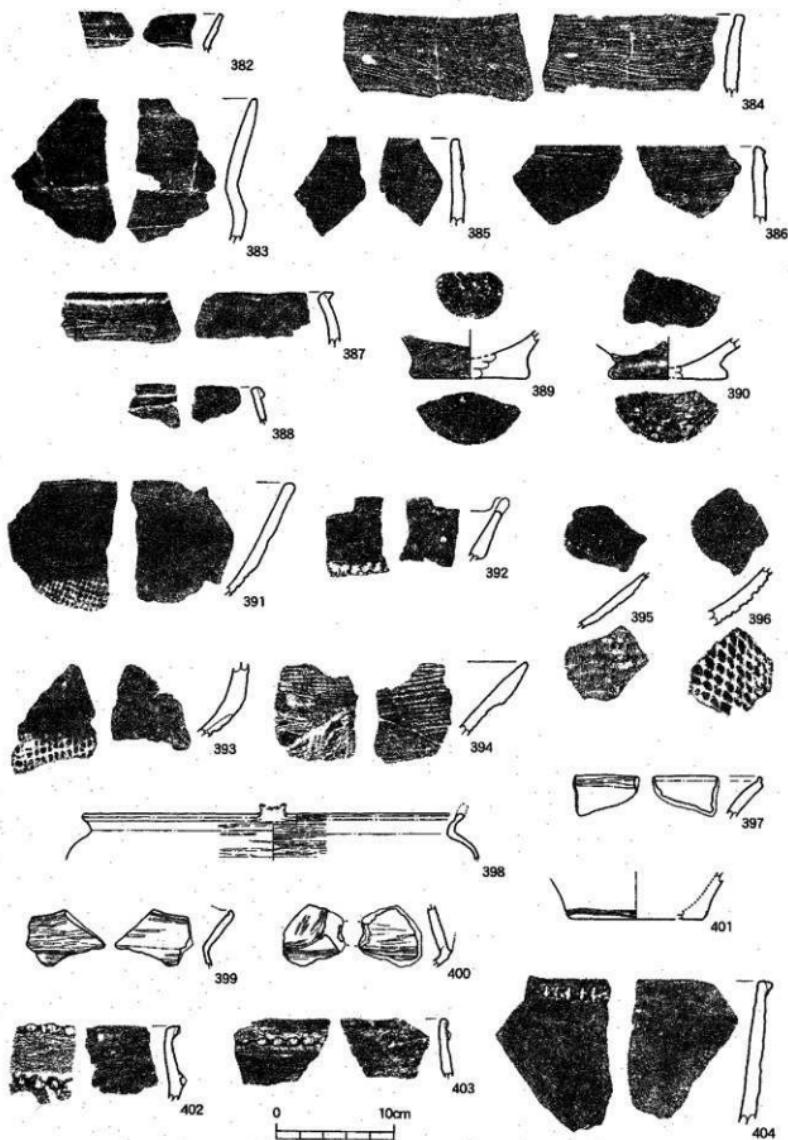
型式不明の土器を一括したものである。

円盤状土製品 (第37図 410~426)

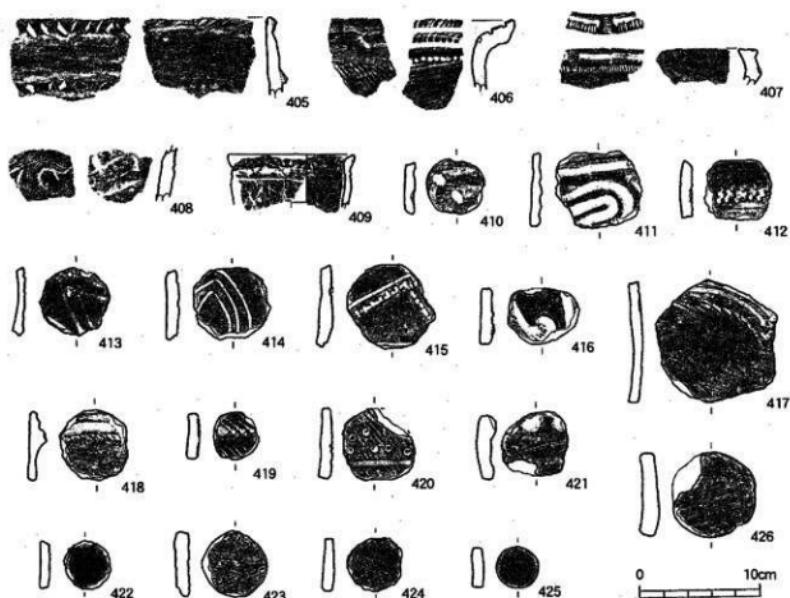
土器片を円形に加工したものである。周縁部を打欠いただけのものが多いが、側面を面取りしたものも認められる。15~19・24~25・29類土器が利用されている。

第1表 円盤状土製品観察表

番 号	形 式	内 容	測 定				附 上				備 考
			長 径 (cm)	短 径 (cm)	重 量 (g)	内 容	左 右 内 面	左 右 外 面	左 右 底 面	左 右 沿 縁	
420	C 26	4.0	3.8	16.8	ヨコ瓦条ナゲ	ヨコ瓦条	○	○			輪削打火 内削文土器
421	C 26	4.5	4.4	22.9	ヨコナゲ	ヨコナゲ	○	○		○	輪削打火 内削文土器
422	H 26	5.4	5.4	26.3	ナゲ	ヨコナゲ	○	○			輪削打火 (一削削) 横削文土器
423	C 26	7.0	6.8	70.5	長いヨコナゲ	長いヨコナゲ	○	○	○		輪削打火 横削式
424	C 26	4.8	4.5	20.4	ヨコナゲ	ヨコナゲ	○	○	○		輪削打火 振削式
425	C 26	5.7	5.6	26.6	ナゲ	ヨコ瓦条ナゲ	○	○		○	輪削打火 横削式
426	C 26	6.3	5.9	51.2	ヨコナゲ	ヨコナゲ	○	○			輪削打火 輪削横文土器
427	S 26	7.2	7.0	65.2	ヨコ瓦条ナゲ	ヨコ瓦条ナゲ	○	○			輪削打火 中削式
428	S 26	5.4	4.9	26.3	ヨコナゲ	ヨコナゲ	○	○	○		輪削打火 中削式
429	HST 26	8.9	4.7	32.4	ヨコ瓦条ナゲ	ヨコ瓦条ナゲ	○	○		○	輪削打火 (一削削) 丸削式
430	C 26	6.0	5.9	42.1	ナゲ	ナゲ	○	○	○		輪削打火 積層瓦条土器
431	S 26	5.4	5.3	40.5	長いヨコナゲ	ヨコナゲ	○	○			輪削打火 轮削横文土器
432	C 26	5.5	5.5	35.5	丁寧なナゲ	ヨコヒガナ	○	○			輪削打火 地面土器?
433	C 26	3.9	3.7	16.8	瓦条	瓦条	○	○			輪削打火 瓦条土器?
434	C 26	7.0	6.4	45.5	ナゲ	ヨコナゲ	○	○			輪削打火 瓦条土器?
435	S 26	3.4	3.4	12.0	ナゲ(横ナゲ)	ナゲ	○	○		○	輪削打火 瓦条土器 中削式?
436	C 26	10.2	9.8	99.9	ヨコヒガナ	ナゲ	○	○	○		輪削打火 中削式



第36図 28~29類土器



第37図 29・30類土器、円盤状土製品

第2表 土器観察表 (1)

番号	部	種	名	測定						備考	
				長	幅	高	厚	底面	底面		
1	A	T	1	丸筒形(100)	約6.2cm	約2.5cm	約0.5cm	ヨコ・ナガリ	ヨコ・ナガリ	○ ○	内壁スルテクニカル面にナカホリ有り、口部に内張鉢文
2	A	T	1	丸筒形(101)	約6.2cm	約2.5cm	約0.5cm	ヨコ・ナガリ	ヨコ・ナガリ	○ ○	内壁スルテクニカル面にナカホリ有り、口部に内張鉢文
3	A	T	2	ヨコ・ナガリ(102)	約6.2cm	約2.5cm	約0.5cm	ヨコ・ナガリ	ヨコ・ナガリ	○ ○	内壁スルテクニカル面にナカホリ有り、口部に内張鉢文
4	A	T	2	ヨコ・ナガリ(103)	約6.2cm	約2.5cm	約0.5cm	ヨコ・ナガリ	ヨコ・ナガリ	○ ○	内壁スルテクニカル面にナカホリ有り、口部に内張鉢文
5	A	T	2	ヨコ・ナガリ(104)	約6.2cm	約2.5cm	約0.5cm	ヨコ・ナガリ	ヨコ・ナガリ	○ ○	内壁スルテクニカル面にナカホリ有り、口部に内張鉢文
6	A	T	2	ヨコ・ナガリ(105)	約6.2cm	約2.5cm	約0.5cm	ヨコ・ナガリ	ヨコ・ナガリ	○ ○	内壁スルテクニカル面にナカホリ有り、口部に内張鉢文
7	A	T	2	ヨコ・ナガリ(106)	約6.2cm	約2.5cm	約0.5cm	ヨコ・ナガリ	ヨコ・ナガリ	○ ○	内壁スルテクニカル面にナカホリ有り、口部に内張鉢文
8	A	T	2	ヨコ・ナガリ(107)	約6.2cm	約2.5cm	約0.5cm	ヨコ・ナガリ	ヨコ・ナガリ	○ ○	内壁スルテクニカル面にナカホリ有り、口部に内張鉢文
9	A	T	2	ヨコ・ナガリ(108)	約6.2cm	約2.5cm	約0.5cm	ヨコ・ナガリ	ヨコ・ナガリ	○ ○	内壁スルテクニカル面にナカホリ有り、口部に内張鉢文
10	A	T	2	ヨコ・ナガリ(109)	約6.2cm	約2.5cm	約0.5cm	ヨコ・ナガリ	ヨコ・ナガリ	○ ○	内壁スルテクニカル面にナカホリ有り、口部に内張鉢文
11	A	T	2	ヨコ・ナガリ(110)	約6.2cm	約2.5cm	約0.5cm	ヨコ・ナガリ	ヨコ・ナガリ	○ ○	内壁スルテクニカル面にナカホリ有り、口部に内張鉢文
12	A	T	2	ヨコ・ナガリ(111)	約6.2cm	約2.5cm	約0.5cm	ヨコ・ナガリ	ヨコ・ナガリ	○ ○	内壁スルテクニカル面にナカホリ有り、口部に内張鉢文
13	A	T	2	ヨコ・ナガリ(112)	約6.2cm	約2.5cm	約0.5cm	ヨコ・ナガリ	ヨコ・ナガリ	○ ○	内壁スルテクニカル面にナカホリ有り、口部に内張鉢文
14	HT	T	2	ヨコ・ナガリ(113)	約6.2cm	約2.5cm	約0.5cm	ヨコ・ナガリ	ヨコ・ナガリ	○ ○	内壁スルテクニカル面にナカホリ有り、口部に内張鉢文
15	A	T	2	ヨコ・ナガリ(114)	約6.2cm	約2.5cm	約0.5cm	ヨコ・ナガリ	ヨコ・ナガリ	○ ○	内壁スルテクニカル面にナカホリ有り、口部に内張鉢文
16	A	T	2	ヨコ・ナガリ(115)	約6.2cm	約2.5cm	約0.5cm	ヨコ・ナガリ	ヨコ・ナガリ	○ ○	内壁スルテクニカル面にナカホリ有り、口部に内張鉢文
17	A	T	2	ヨコ・ナガリ(116)	約6.2cm	約2.5cm	約0.5cm	ヨコ・ナガリ	ヨコ・ナガリ	○ ○	内壁スルテクニカル面にナカホリ有り、口部に内張鉢文
18	A	S	2	ヨコ・ナガリ(117)	約6.2cm	約2.5cm	約0.5cm	ヨコ・ナガリ	ヨコ・ナガリ	○ ○	内壁スルテクニカル面にナカホリ有り、口部に内張鉢文

第三章　まとめにかえて

1 遺構

遺構は集石遺構が8基検出された。1号集石のそばから前平式土器口縁部片が出土していることや、遺構検出層であるA地区のⅦ層からは前平式土器が多く出土していることなどから、1～3号集石は前平式期に位置づけられる可能性が高い。

4・6～8号集石は、その検出層であるA地区的Ⅲ層では晩期土器、特に口縁端部が肥厚する深鉢形土器や組織直土器が認められることから、黒川式期に位置づけられる可能性が高い。

2 土器

家野遺跡で出土した土器を既存の型式・タイプにあてはめると、以下のとおりである。

1類：岩本タイプ（長野1984）・岩本式土器（新東1989）　2類：前平式土器　3類：加栗山タイプ（長野1984）・加栗山式土器（前追1983）　4類：吉田式土器　5類：加栗山式または吉田式的底部　6類：下剥峯式土器　7類：桑ノ丸式土器　8類：押型文土器　9類：塞ノ神Aa式土器　10類：曾煙式土器　11類：深浦式土器　12類：春日式土器　13類：協和式土器　14類：南福寺式土器　15類：阿高式系土器・岩崎式土器・宮ノ前式土器（新東1988）　16類：指宿式土器　17類：擬似縄文土器　18類：市来式土器　19類：丸尾式土器（前追1992）　20類：草野式土器　21類：納屋向タイプ（前追1992）　22類：納曾式土器　23類：台付皿形土器　24類：磨消縄文土器　25類：中岳式土器（河口1980）　26類：三万田式・鳥井原式・御領式土器　27類：後期底部一括　28類：入佐式～黒川式土器　29類：夜臼式土器　30類：型式不明土器

16類の指宿式のうち、a類とした口唇部に沈線文を施すものは中原VA類タイプ（水ノ江1993）、17類の擬似縄文土器のうち、二枚貝による貝殻擬似縄文を施すものは中原IVB類タイプ（水ノ江1993）である。

24類の磨消縄文土器のうち、a類は中原IVA類タイプ（水ノ江1993）、b類は鍾崎式、c類は北久根山式、d類は辛川式、e類は西平式、f類は太郎迫式である。

25類の中岳式のうち、a・b類は中岳I式、c～e類は中岳II式である。また、h類とした突彌形を呈するものは從来の型式概念にあてはまらないものの、胎土・色調などがa～g類に類似していることから、中岳式の器種の1つと考えられる。

27類の後期底部一括のうち、a～d類は阿高式系土器・指宿式・市来式・丸尾式に、e類は中岳式に、f類は鍾崎式～太郎迫式に伴う可能性が高い。

家野遺跡では縄文早期後半から中期後半にかけて出土量が少なくなるものの、早期から晩期にかけての各型式が認められることから、ほぼ連續的にこの地が利用されてきたことが分かる。そのなかでも、中期末から後期にかけての資料が多く、本遺跡の中心となる時期をなす。

また、縄文後期の遺物がB・C地区のような狭い調査範囲から多量に出土していることは特徴的であろう。一方、前平式を中心とする早期土器と黒川式を中心とする晩期土器がA地区から認められるというように、後期土器と分布域が分かれていることは興味深い。

以上、縄文土器について触れてきたが、当然のことながら家野遺跡からは土器だけではなく、石器も数多く出土している。しかし、膨大な遺物量と限られた整理期間のため、まずは多種多様な土器についてしっかりと分類・選別を行い、なるべく多くの資料を掲載することを優先した。そのため、石器については今回報告することができなかった。機会をあらためて報告を行いたいと思う。

(引用・参考文献)

- 河口貞徳 1980 「中岳洞穴」未吉町教育委員会

新東晃一 1988 「縄文土器－九州地方南九州（2）－」『考古学ジャーナル』296

新東晃一 1989 「早期九州貝殻文系土器様式」『縄文土器大綱』1

長野眞一 1984 「第V章まとめ」『上祓川遺跡群』鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書（1）

前追亮一 1992 「異系統土器文化の一接点」『南九州縄文通信』6

前追亮一 1993 「倉園B遺跡の再検討Ⅰ」『南九州縄文通信』7

水ノ江和同 1993 「九州の縄文土器－九州における縄文後期前・中葉土器研究の現状と課題」『古文化講座』30（上）

第3表 土器觀察表 (2)

第4表 土器觀察表（3）

第5表 土器觀察表（4）

第6表 土器觀察表(5)

第7表 土器觀察表 (6)

第8表 土器觀察表(7)

(左側) 一石多孔・石英・磷灰鉄
中央) 鉛鉱石・磷灰鉄
右側) 金・銀鉱石



① 遺跡遠景（北より）



② 遺跡遠景（北より）



③ 土層断面図（12トレンチ 北壁）



④ 土層断面図（16トレンチ 西壁）



⑤ A地区調査風景（北東より）



⑦ B地区遺物出土状況（北より）



⑥ A地区遺物出土状況（南西より）



① C地区調査風景（東より）



② C地区Ⅲ層遺物出土状況（西より）



③ 前平式土器出土状況



④ 阿高式系土器（No.73と82）出土状況



⑤ 1号集石遺構検出状況



⑦ 4号集石遺構検出状況（北より）



⑥ 6～8号集石遺構検出状況（西より）

あとがき

“目映い日差し”の中での緊急全面発掘調査は、予想通り期間に追われるものとなった。

調査を進めると、その膨大な遺物量に驚かされる毎日であった。すぐに遺物取上げをしないと、作業員さんが発掘できなくなるため、次から次へと測量を実施しないと調査が進まない……。工事は差し迫ってくる……。次の現場は待っている……。

結果、町内有数の資料を提供する遺跡の調査は、慌しく終了しなければならなかった。これほど、期間と測量に追われた現場があつただろうか……。

そして、整理作業も膨大な遺物量と限られた期間に追われることになった。報告書ではなるべく多くの資料を掲載することに努めたが、満足できる内容には至らなかった。そのため、多種多様な遺物をもつ家野遺跡の特徴を、報告書として十分に復元できたとは思えない。今後、報告書の不十分な内容については、機会あるごとに少しづつでも補っていきたい。

最後になりましたが、炎天下の中での発掘作業を、要領の悪い調査員とともに、一生懸命こなしていただいた作業員の皆様に、心より感謝申し上げます。また、発掘調査及び報告書作成にあたり、ご指導・ご協力いただいた方々にも心より感謝を申し上げます。

志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書(24)

家 野 遺 跡

発行日 1994年3月

発 行 志布志町教育委員会(鹿児島県曾於郡志布志町志布志2542番地)

印刷所 志布志印刷有限会社(鹿児島県曾於郡志布志町安来1966-2)